

## 薬物乱用・依存の世帯調査

分担研究者 福井 進 光洋会三芳病院院長  
研究協力者 和田 清 国立精神・神経センター精神保健研究所  
薬物依存研究部部長  
菊池 周一 同研究部室長  
尾崎 茂 同研究部室長  
浦田重治郎 国立精神・神経センター国府台病院  
第一病棟部長

**研究要旨** 無作為に抽出した全国の15歳以上の男女5千人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存の住民調査を施行した。有効回答数（率）は3,778(75.6%)であった。調査は、住民の薬物乱用問題のみならず、住民の日常生活のあり方、喫煙・飲酒の状況、睡眠薬など医療用薬物の使用状況など多岐にわたっており、健康保健全般について施行した。最近1年間に治療の目的で精神安定薬を使用した人は6.4%±0.8%、睡眠薬を使用した人は4.9%±0.7%であり、非常に多くの人が使用していることが判明した。これまで違法薬物を乱用した人は、有機溶剤1.8%±0.5%、覚せい剤0.3%±0.2%、大麻0.5%±0.2%であったが、最近1年間に乱用した人はその比率が著しく低く、統計的に同定できなかった。1995年度の調査結果を比較し、社会での有機溶剤乱用者の減少と大麻の潜在的乱用者が予想以上に多いことが判明した。わが国の薬物乱用の実態、動向の把握と世帯調査の意義について考察した。

### A. 研究目的

薬物乱用・依存問題は、世界各国とも重要な社会対策の一つとしてその取締、予防、教育・啓発、治療に取り組んでいるが、その状況は依然として深刻である。

わが国では、覚せい剤と有機溶剤が主要な乱用薬物として長年にわたり乱用されてきたが、近年、それらの物質の乱用をめぐる状況が大きく変化してきた。未成年者のシンナー等有機溶剤乱用による検挙者の減少傾向がみられるのに対して覚せい剤事犯検挙者の増加である。平成6年の覚せい剤事犯検挙者は1万5千人を下回ったが、翌7年は17,364人に、8年は19,666人と急増してきた。その中で高校生等の検挙者の急増に示されるように覚せい剤乱用の低年齢化が特徴である<sup>9</sup>。このまま覚せい剤乱用が浸透していけば第三次覚せい剤乱用期に発展しかねない深刻な状況を迎えている。

薬物乱用の歴史を振り返っても薬物乱用の流れは、時代、社会の変化により刻々と変化していることが分かる。その実態、動向の把握には経年的かつ多面的な疫学的調査が必要である。

われわれは、厚生科学研究費にて平成4年

度より一般住民、全国の精神科医療施設、救命救急センター、中学校、児童福祉施設などを対象に多面的な疫学調査を施行し、実態の把握に努めてきた。

世帯（住民）調査は、平成4年度は市川市民1,100人<sup>2</sup>、平成5年度は東京圏、大阪圏の住民3,000人<sup>3</sup>、平成6年度は東京圏、大阪圏、北九州圏の住民3,300人<sup>4</sup>そして平成7年度は全国の5,000人<sup>5</sup>を対象に行われた。特に平成7年度の調査はわが国で行われた初めての全国的、本格的な調査研究である。

これまでの調査結果、調査内容、調査方法を参考にして、平成9年度は全国の5,000人を対象とした調査を行った。平成7年度の調査結果と比較検討することにより、薬物乱用・依存の動向と実態の把握と予防・教育・啓発対策の基礎資料となることを目的とする。

### B-1. 研究方法

企画は分担研究者の福井が担当し、調査の実施は社団法人新情報センターに委託した。

- ・地域 全国
- ・対象 市区町村に住む満15歳以上の男女  
標本数5,000

- ・抽出方法 層化2段無作為抽出法  
(調査地点数=350)
  - ・調査方法 調査員による個別訪問留置法
  - ・調査内容 前年度の調査結果を参考にして別表(末尾)の72からなる質問内容を設定
  - ・調査期間 平成9年11月20日～12月8日
  - ・調査機関 社団法人新情報センター
- なお、資料の集計は新情報センターが行ない、解析は福井が行なった。

## B-2. 標本抽出方法－層化2段無作為抽出法

この種の疫学調査で最も重要なことは、全国の市区町村に住む15歳以上の男女5千人をいかに無作為にそして適切に抽出するかである。われわれは標本抽出法は層化2段無作為抽出法を初回調査から用いてきたが、現在最も正しい抽出法であるとされている。

平成7年度研究報告書<sup>5</sup>にて層化2段無作為抽出法について説明したが、再度本報告書で説明する。表1に示した表を参考にしていただきたい。

### [層化]

1. 全国の市区町村を都道府県を単位として次の11地区に分類した。

北海道地区＝北海道

東北地区＝青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

関東地区＝茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

北陸地区＝新潟県、富山県、石川県、福井県

東山地区＝山梨県、長野県、岐阜県

東海地区＝静岡県、愛知県、三重県

近畿地区＝滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中国地区＝鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国地区＝徳島県、香川県、愛媛県、高知県

北九州地区＝福岡県、佐賀県、長崎県、大分県

南九州地区＝熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

2. 各地区においては、さらに都市規模によって次のように16分類しそれぞれを第1次層として、計46層とした(表1を参考)。

○大都市(各都市ごとに分類)

(東京都区部、札幌市、仙台市、千葉市、横浜市、川崎市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市)

○人口10万人以上の都市

○人口10万未満の都市

○町村

(注)ここでいう都市とは、平成9年4月1日現在による市制施行の地域である。

また、人口による都市規模の分類は、平成8年3月31日現在住民基本台帳に基づく「住民基本台帳人口要覧」(自治省行政局編)によった。

### [標本数の配分及び調査地点の決定]

地区・都市規模別各層における母集団数(平成8年3月31日現在の15歳以上の人口=105,200,205)の大きさにより、5,000の標本数を比例配分する。人口密度により標本数を比例配分する作業を層化という。

なお、各調査地点の標本数が11～16になるように調査地点を決めた。

### [抽出]

1. 第一次抽出単位となる調査地点として、平成7年国勢調査時に設定された調査地区を使用した。

2. 調査地点(調査区)の抽出は、調査地点数が2地点以上割り当てられた層については、  
抽出間隔＝〔層における国勢調査の調査区の数(計)〕÷〔層で算出された調査地点数〕  
を算出し、等間隔抽出法によって抽出した。また、層内で調査地点数が1地点の場合には、乱数表により無作為に抽出した。

調査地点を選ぶ操作を1段という。

3. 抽出に際しての各層内における市区町村の配列順序は、平成7年国勢調査時の市町村コードに従った。

4. 調査地点における対象者の抽出は、調査地点の範囲内(町・丁目・番地等を指定)で標本となる対象者が抽出できるように  
抽出間隔＝〔調査地点における国勢調査時の15歳以上人口〕÷〔調査地点抽出標本数〕  
を算出し、住民基本台帳より等間隔抽出法によって抽出した。地区から対象者を抽出する操作を2段という。以上の抽出作業の結果、得られた地区別標本数・調査地点は表1に示す。

表1 地区・都市規模による調査標本数と地点数—標本数(地点数)

	大 都 市				人口10万 以上の市	人口10万 未満の市	郡 部 (町村)	計
	東京都 区部	横浜 京都	川崎・大阪 北九州	その他 の市				
北海道				70( 5)	68( 5)	36( 3)	54(4)	228( 17)
東 北				38( 3)	117( 8)	93( 7)	143(10)	391( 28)
関 東	327(22)	133( 9)	48( 4)	34( 3)	617(42)	231(16)	195(13)	1585(109)
北 陸					84( 6)	66( 5)	74( 5)	224( 16)
東 山					70( 5)	55( 4)	80( 6)	205( 15)
東 海				84( 6)	215(14)	92( 6)	100( 7)	491( 33)
近 畿		57( 4)	102( 7)	58( 4)	361(24)	129( 9)	112( 8)	819( 56)
中 国				43( 3)	121( 8)	62( 5)	84( 6)	310( 22)
四 国					65( 5)	40( 3)	65( 5)	170( 13)
北九州			41( 3)	49( 4)	70( 5)	80( 6)	99( 7)	339( 25)
南九州					88( 6)	58( 4)	92( 6)	238( 16)
計	327(22)	190(13)	191(14)	376(28)	1876(128)	942(68)	1098(77)	5000(350)

郵送法による調査の場合は、層化の段階で無作為に抽出はできるが、調査員による訪問回収の場合は地域を設定する必要があるが、層化2段無作為抽出法が統計的に最も適した方法であり、われわれは今年度の調査でも層化2段無作為抽出法を採用した。

### C. 結果

#### 1. 回収結果(表2、3)

有効回収数(率)は3,778(75.6%)であった。1995年度の3,946人(78.9%)に回答数(率)に劣るが、過去4回の調査でいずれも70%を超えており、この種の調査では高い回答率であ

ったといえる。

事故数(率)は1,222(24.4%)であり、その内訳は表2の通りである。

1995年度の回答率(78.9%)、事故率(21.0%)に比べやや劣るが、今年度の調査期間が約12日間短かったこと、調査が12月にまたがったことが関係していたと考える。

調査期間中に調査対象住民より3件の電話による問合わせがあったが、いずれも調査の目的、調査会社の性質を確認する問合わせの質問であり、調査は特に問題なく順調に実施されたと言える。

なお、地区別回収数(率)は以下の表3に示した。

表2 回答数(率)及び事故数(率)

調査対象数	5,000
回答数(率)	3,778(75.6%)
事故数(率)	1,222(24.4%)
事故の内訳	
転居	130(10.6%)
長期不在	76(6.2%)
一時不在	319(26.2%)
住居不明	42(3.4%)
拒否	535(43.8%)
その他	120(9.8%)

表3 地区別標本数と回収数(率)

地 区	標本数	回答数(率)
北海道	228	182(79.8)
東 北	391	309(79.0)
関 東	1585	1095(69.1)
北 陸	224	199(88.8)
東 山	205	178(86.8)
東 海	491	382(77.8)
近 畿	819	592(72.3)
中 国	310	233(75.2)
四 国	170	130(76.5)
北九州	339	263(77.6)
南九州	238	215(90.3)
計	5000	3778(75.6)

## 2. 調査結果

### [調査結果と標本誤差]

標本誤差は、サンプル数と得られた結果の比率によって異なるが、単純任意抽出法（無作為抽出）を仮定した場合の誤差（95%は信頼できる誤差の範囲）の算出方法と結果は下記のとおりである。

b=標本誤差（単純無作為抽出の場合）

N=母集団数

n=比率算出の基数（サンプル数）

p=回答の比率

N=15歳以上の男女105200205（男性51245068、女性53955137）人

注：平成8年3月31日現在の「住民基本台帳人口要覧」（自治省行政局編）

n=回収サンプル数3778

$b=2*\sqrt{(N-n)/(N-1)*p(1-p)/n}$  (n=3778の場合)

$(N-n)/(N-1) \approx 1$

p	誤差	p	誤差
0.001	±0.0010	0.1 %	±0.1 %
0.002	±0.0015	0.2 %	±0.1 %
0.003	±0.0018	0.3 %	±0.2 %
0.004	±0.0021	0.4 %	±0.2 %
0.005	±0.0023	0.5 %	±0.2 %
0.006	±0.0025	0.6 %	±0.3 %
0.007	±0.0027	0.7 %	±0.3 %
0.008	±0.0029	0.8 %	±0.3 %
0.009	±0.0031	0.9 %	±0.3 %
0.01	±0.0032	1.0 %	±0.3 %
0.02	±0.0046	2.0 %	±0.5 %
0.03	±0.0056	3.0 %	±0.6 %
0.04	±0.0064	4.0 %	±0.6 %
0.05	±0.0071	5.0 %	±0.7 %
0.06	±0.0077	6.0 %	±0.8 %
0.07	±0.0083	7.0 %	±0.8 %
0.08	±0.0088	8.0 %	±0.9 %
0.09	±0.0093	9.0 %	±0.9 %
0.10	±0.0098	10.0 %	±1.0 %
0.20	±0.0130	20.0 %	±1.3 %
0.30	±0.0149	30.0 %	±1.5 %
0.40	±0.0159	40.0 %	±1.6 %
0.50	±0.0163	50.0 %	±1.6 %

なお、本調査のように層化2段無作為抽出法による場合は標本誤差が若干増減する。調査結果は上記の標本誤差を参考にさせていただきたい。

## (1) 回答者の性、年齢、学歴、職業別分類

表4 対象の性、年齢、学歴

性別 ＼ 年齢	総数 (%)	男性 (%)	女性 (%)
	3778(100.0)	1825(100.0)	1953(100.0)
15～19歳	287( 7.6)	145( 7.9)	142( 7.3)
20～29歳	474( 12.5)	209( 11.5)	265( 13.6)
30～39歳	629( 16.6)	267( 14.6)	362( 18.5)
40～49歳	763( 20.2)	351( 19.2)	412( 21.1)
50～59歳	744( 19.7)	379( 20.8)	365( 18.7)
60歳以上	881( 23.3)	474( 26.0)	407( 20.8)
学歴			
小学卒	89( 2.4)	41( 2.2)	48( 2.5)
中学卒	661( 17.5)	340( 18.6)	321( 16.4)
高校卒	1886( 49.9)	868( 47.6)	1018( 52.1)
大学卒	1034( 27.4)	527( 28.9)	507( 26.0)
無回答	108( 2.9)	49( 2.7)	59( 3.0)

表5-1 職業別分類(就業形態)

対象 ＼ 就業形態	総数	男性	女性
	3778	48.3	51.7
自営業 (計)	753	57.6	42.4
自営業主	490	76.1	23.9
家族従業者	263	23.2	76.8
勤め人 (計)	1696	57.8	42.2
勤め人(民間会社)	1077	72.4	27.6
勤め人(公務員)	197	70.6	29.4
勤め人(パート等)	422	14.7	85.3
学生 (計)	303	51.8	48.2
中学生	31	51.6	48.4
高校生	172	51.7	48.3
予備校生	7	42.9	57.1
専門学校・各種学校生	24	33.3	66.7
短大・大学・大学院生	69	59.4	40.6
主婦専業	596	-	100.0
無職	379	58.6	41.4
*有職 (計)	2449	57.8	42.2
*無職 (計)	1278	29.7	70.3

性、年齢、学歴別分類は表4に示した。

性別は、男性1,825人(48.3%)、女性1,953人(51.7%)であり、女性が多かった。

年齢別分類は表4に示したとおりである。

学歴は、小学校卒2.4%(男性2.2%、女性2.5%)、中学卒17.5%(男性18.6%、女性16.4%)、高校卒49.9%(男性47.6%、女性52.1%)、大学卒27.4%(男性28.9%、女性26.0%)であった。高校卒以上の学歴を有す

る人は77.3%であった。なお、大学卒は20歳代46.6%、30歳代39.7%、40歳代35.9%、50歳代35.9%、60歳代13.5%であり、高学歴化社会を示す結果であった。

なお、大学卒は旧制高等学校・短大、高校卒は旧制中学、中学卒は尋常高等小学校、小学校卒は尋常小学校を含むものである。

職業別分類は表5-1に就業形態、表5-2に仕事内容を示した。

表5-2 職業別分類(仕事内容)

対 象	総 数	男 性	女 性
仕事内容	3778	48.3	51.7
自営業 (計)	720	58.2	41.8
農林漁業	159	55.3	44.7
商店主	208	55.8	44.2
工場主	92	60.9	39.1
土木建設業主	78	78.2	21.8
医療関係事業主	16	62.5	37.5
サービス業事業主	132	50.8	49.2
その他の事業主	35	60.0	40.0
勤め人 (計)	1662	58.2	41.8
販売従事者	264	45.7	44.3
保安従事者	31	93.5	6.5
運輸従事者	72	91.7	8.3
通信従事者	3	100.0	—
サービス業従事者	88	20.5	79.5
技能職従事者	42	31.0	69.0
土木建築業従事者	94	98.9	1.1
工場労働者	246	66.3	33.7
その他の労務従事者	62	35.5	64.5
事務従事者	352	45.2	54.8
管理的職業	91	96.7	3.3
医療職従事者	59	13.6	86.4
その他専門・技能職従事者	167	71.9	28.1
その他	91	41.8	58.2

(2) 日常生活に関する質問

問1. 最近1年間のあなたの健康状態や生活状態などについてお伺いいたします。以下のア～キのそれぞれについて、お答えください。(それぞれ○は1つ)

1) あなたの健康状態はいかがですか (表6)

「健康状態はよくない」と回答した人は625人(16.5%)であり、男性16.0%、女性17.1%であった。当然のことであるが、男女とも年齢が50歳を過ぎると「よくない」と答える

人は高率となり、50歳代19.5%、60歳代25.5%であった。女性の方が高率の傾向を認めた。(図1)

2) あなたは、日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか (表7)

「意欲がなくなることがある」と回答した人は1,110人(29.4%)であったが、10歳代、20歳代の若年層はそれぞれ38.0%、60歳以上の人は23.2%と高年齢になるにつれて低率になる傾向を認めた。

表6 あなたの健康状態はいかがですか (%)

総対象数	良好である	概ね良好である	時々思わしくない	常時調子が悪い	無回答	良好 (小計)	よくない (小計)
3778人 (100.0)	1152 (30.5)	1986 (52.6)	538 (14.2)	87 (2.3)	15 (0.4)	3138 (83.1)	625 (16.5)

図1 健康状態がよくないと回答した人の性、年齢別分布 (%)

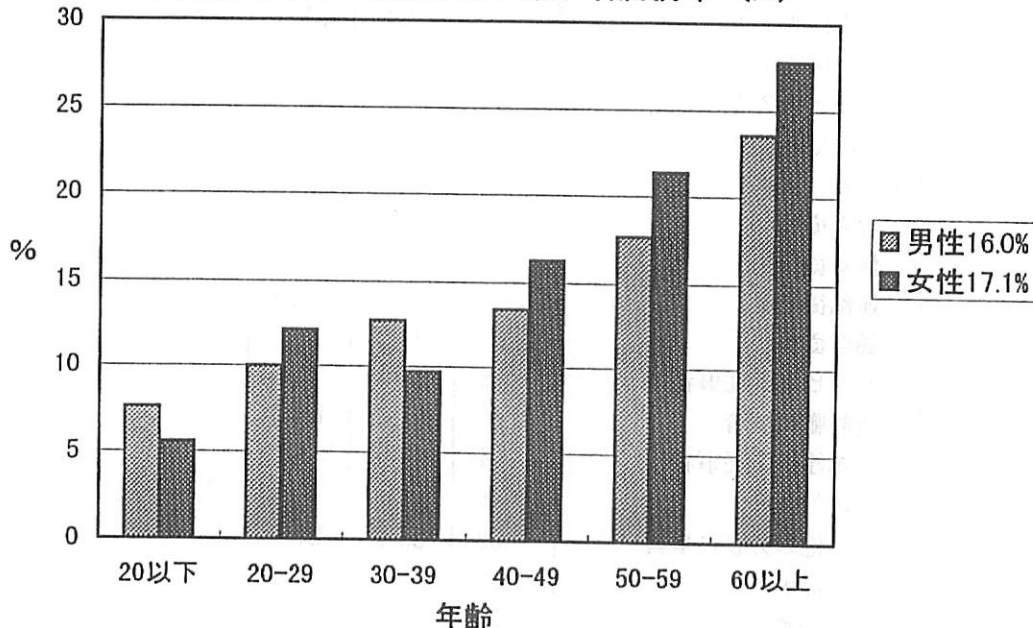


表7 あなたは、日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
3778人 (100.0)	276 (7.3)	834 (22.1)	2082 (55.1)	567 (15.0)	19 (0.5)	1110 (29.4)	2649 (70.1)

3)あなたは、毎日の仕事・学業でうまくいかないことがありますか(表8)

「仕事・学業でうまくいかない」と回答した人は1,474人(39.0%)であり、年齢層が低いほど高率の傾向を認めた(10歳代59.2%)。

4)あなたは、日常の生活で不安を感じ、緊張したことがありますか(表9)

「日常生活で不安感、緊張感を感じる」と回答した人は1,736人(46.0%)であった。

5)あなたは、眠りにつけなかったり、睡眠の途中で目が覚めたり、眠った感じがしなくて困ることがありますか(表10、図2)

「眠りにつけなかったりして困った」と回答した人は2,277人(60.3%)であったが、「週に1~2回・3回以上」の不眠をもつ人は404人(10.7%)であった。60歳以上の高齢者は16.5%(男14.1%、女19.1%)と高率で

あり、特に女性にその傾向を認めた。(図2)

6)あなたは、眠りすぎたり、昼間眠くてたまらないことがありますか(表11)

眠りすぎたり、昼間眠くてたまらないことがあると答えた人は2,659人(70.4%)であった。そして「週に1~2回・3回以上ある」と回答した人は468人(12.4%)であったが、特に若年層に高率で、10歳代で29.3%であった。若年層の夜更かしなど生活リズムの乱れが大きく影響しているものと考えられる。

7)あなたは、現在の生活に満足していますか(表12)

「現在の生活に満足している」「まあ満足している」と回答した人は3018人(79.9%)であった。大きな年齢差はないが、高年齢層に満足していると回答した人がより高率であった。

表8 あなたは、毎日している仕事(家事・勉強)でうまくいかないことがありますか(%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
3778人 (100.0)	330 ( 8.7)	1144 (30.3)	1970 (52.1)	305 ( 8.1)	29 ( 0.8)	1474 (39.0)	2275 (60.2)

表9 あなたは、日常の生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか(%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
3778人 (100.0)	285 ( 7.5)	1451 (38.4)	1716 (45.4)	307 ( 8.1)	19 ( 0.5)	1736 (46.0)	2023 (53.5)

表10 あなたは、眠りにつけなかったり、睡眠の途中で目が覚めたり、眠った感じがしなくて困ることがありますか(%)

総対象数	週に3回以上ある	週に1、2回ある	たまにある	ない	無回答	ある(小計)
3778人 (100.0)	149 ( 3.9)	255 ( 6.7)	1873 (49.6)	1674 (39.0)	27 ( 0.7)	2277 (60.3)



図2 週に1-2回・3回以上不眠を経験する人 (%)

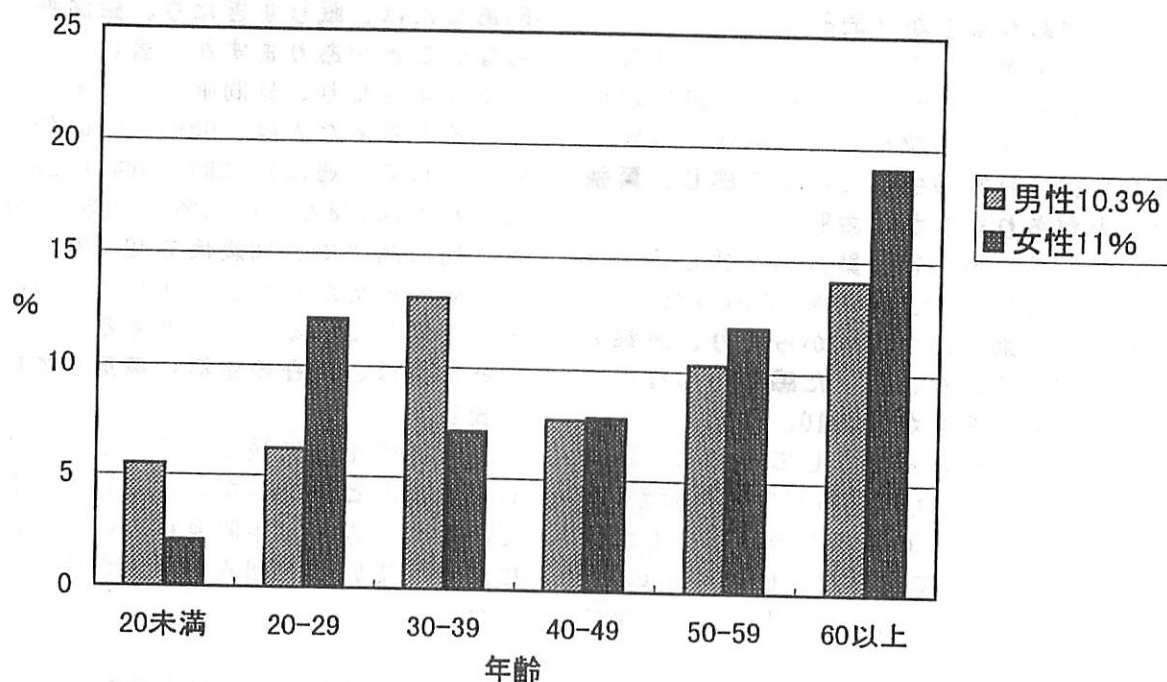


表11 あなたは、眠り過ぎたり、昼間に眠くてたまらないことがありますか (%)

総対象数	週に3回以上ある	週に1、2回ある	たまにある	ない	無回答	ある (小計)
3778人 (100.0)	185 (4.9)	288 (7.5)	2191 (58.0)	1094 (29.0)	25 (0.7)	2659 (70.4)

表12 あなたは、現在の生活に満足していますか (%)

総対象数	満足している	まあ満足している	少し不満である	全く不満である	無回答	満足 (小計)	不満 (小計)
3778人 (100.0)	792 (21.0)	2226 (58.9)	657 (17.4)	77 (2.0)	26 (0.7)	3018 (79.9)	734 (19.4)

(3) 嗜好品に関する質問

1) 喫煙

a. あなたは、現在たばこを吸っていますか

① 喫煙率 (年齢と性別) 表13

現在、喫煙をしている人 (率) は1235 (32.7%±) であり、男性51.7%、女性15.0%であった。1995年度の調査に比べ、全体の喫煙率

は横這いであったが、男性は1.6ポイント下がり、女性は1.1ポイント上っていた。

男性の喫煙率は20歳未満は24.8%であったが、20歳代~40歳代は60.3~63.7%と高率であり、50歳代 (52.8%)、60歳以上 (41.4%) は低下していた。

女性は20歳代が24.2%、30歳代が18.8%と

高率であり、年齢が高くなるにつれて喫煙率は低下していった。20歳未満は10.6%と最も低率であったが、1995年度の調査と比べ大幅に増加していたのが特徴であった。未成年女子の喫煙率は上昇している。

喫煙本数は、男性は11～20本/日、21本以上/日の喫煙者が多いのに対し、女性は20本/日以下の喫煙者が多かった。

②禁煙者率（表13、図3）

現在、禁煙中の方は534人（14.1%）で、うち男性20.4%、女性8.2%）であった。

男性は、30歳代から禁煙者は増え始め、50歳代23.2%、60歳以上34.2%と増えている。

女性は、30歳代（14.4%）、20歳代（10.2%）、40歳代（9.5%）が高率であった。

b.（喫煙者への質問）

これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありあすか（禁煙のころみ）（表14）

喫煙者1235人に対し「健康その他の理由で禁煙をしようとしたことがあったか」の質問に対し、「禁煙を考えたが実行していない」506人（41.6%）、「禁煙に失敗した」345人（27.9%）と回答しており、喫煙者の69.5%が禁煙をしたいと考えていたことが判明した。

表13 あなたは、現在たばこをお吸いになりますか（%）

状況 対象	日に 1～10本	日に11～ 20本	日に21本 以上	主にパイ プたばこ	喫煙者数 (率) 計	禁煙中	以前から 吸わない	吸わない (計)
3778人 (100.0)	345 (9.1)	577 (15.3)	309 (8.2)	4 (0.1)	1235 (32.7)	534 (14.1)	1901 (50.3)	2435 (64.5)
男1825人 女1953人	(11.3) (7.1)	(24.7) (6.5)	(15.5) (1.4)	(0.2) -	(51.7) (15.0)	(20.4) (8.2)	(26.4) (72.7)	(46.8) (80.9)

図3 禁煙者の性・年齢別分布

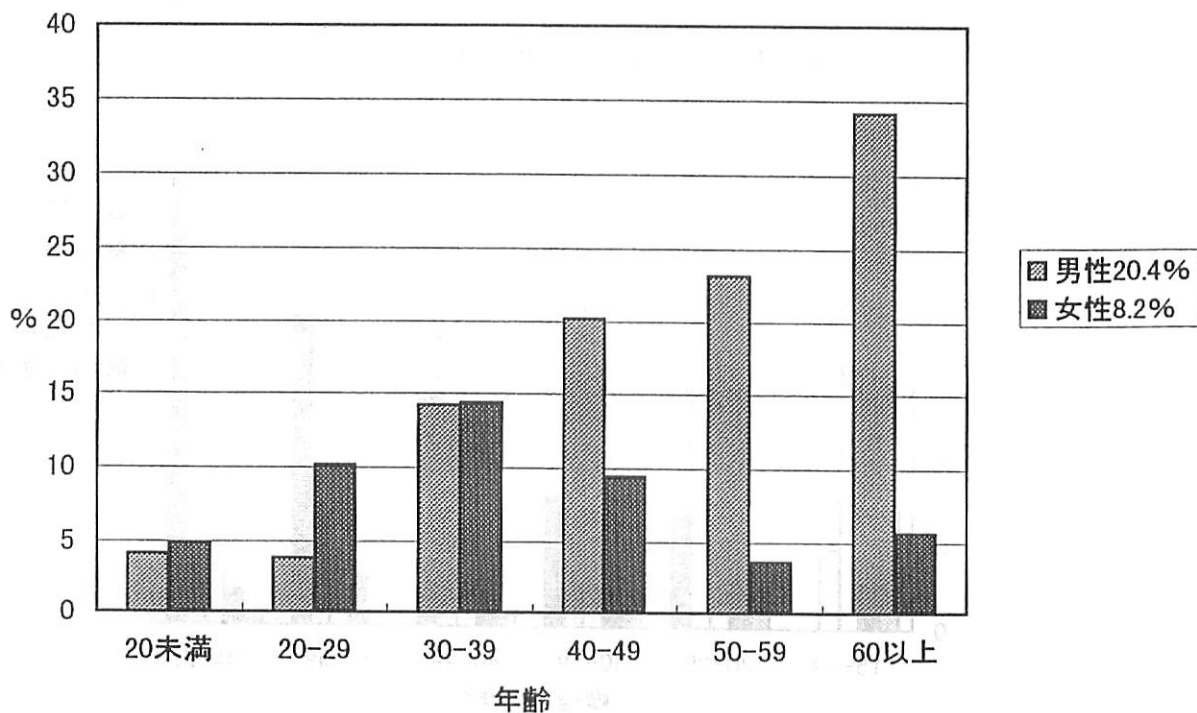


表14 これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか (%)

該当数	禁煙を考えたことはない	禁煙を実行していない	禁煙を失敗した	その他	無回答
1235人 (100.0)	316 (25.6)	506 (41.6)	345 (27.9)	46 (3.7)	22 (1.8)

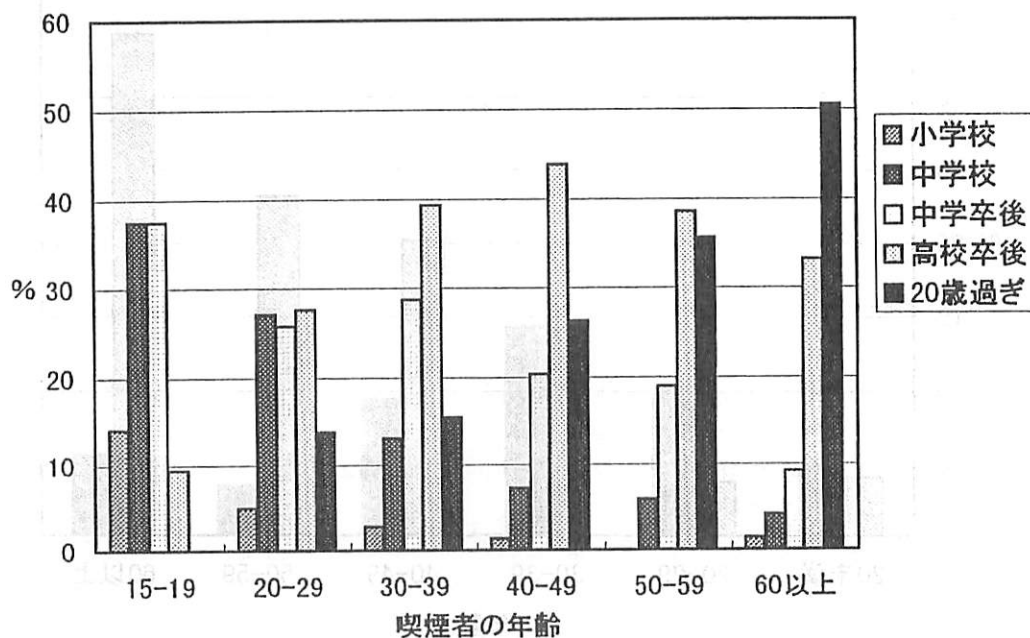
表15 あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか (%)

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
1769人 (100.0)	40 (2.3)	193 (10.9)	359 (20.3)	639 (36.1)	519 (29.3)	19 (1.1)

表16 では、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか (%)

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
1769人 (100.0)	3 (0.2)	50 (2.8)	180 (10.2)	612 (34.6)	823 (46.5)	101 (5.7)

図4 初めて喫煙を経験した時期の年齢分布



c. あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか（初回喫煙経験年齢）（表15、図4）

喫煙経験者1769人に、初めてたばこを吸った時を質問した。

「初めてたばこを吸った時期」は、小学校時代2.3%、中学校時代10.9%、中卒後18歳未満20.3%、18~20歳未満36.1%、20歳過ぎてから29.3%であり、約70%の人が20歳未満で初めて喫煙を経験していた。

特に未成年者は、小学校時代14.1%、中学時代37.5%、中卒後37.5%が喫煙を経験しており、年齢層が高くなるにつれて18歳以降から喫煙を経験する率が高くなった。若年層の喫煙開始の低年齢化を示す結果であるが、1995年度の調査結果よりも低年齢化が進んでいた。

d. あなたが、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか（%）（表16）

「本格的にたばこを吸った時期」を質問したが、興味本位から、あるいは誘われて喫煙を始めた時期に比べて、本格的に喫煙を始めた時期は大分遅れている。小学校時代(0.2%)、

中学校時代(2.8%)は少なく、18~20歳未満(34.6%)、20歳過ぎてから(46.5%)が多かった。

しかし、当然のこととはいえ未成年の喫煙者が本格的に開始したのは中学時代23.4%、中卒後51.6%と高率であり、昨今の喫煙開始の低年齢化を示している。

2) 飲酒

a. アルコール（酒、ビール、ウイスキー）はお飲みになりますか（性、年齢の関係）（表17）

アルコールを飲むという人は2558人(67.7%)で、男性79.5%、女性56.7%であった。

「殆ど毎日飲む人」は21.4%（男性36.3%、女性7.5%）であったが、男性は40歳代41.9%、50歳代52.2%の順で高率であり。女性は20歳代、30歳代、40歳代が8%台を占めていた。男性は「週に2~3回」以上の習慣飲酒者が多く、女性は「月に1~2回」以下の機会的飲酒者が多かった。

「飲酒しない人」は30.3%（男性19.2%、女性40.6%）であった。

表17 アルコール（酒、ビール、ウイスキー等）はお飲みになりますか（%）

状況 対象	年に10回 以内飲む	月に1~2 回飲む	週に1回 飲む	週に2~3 回飲む	週に4回 回飲む	ほとんど 毎日飲む	飲む (計)
3778人 (100.0)	530 (14.0)	480 (12.7)	263 (7.0)	316 (8.4)	160 (4.2)	809 (21.4)	2558 (67.7)
男1825 女1953	(9.5) (18.2)	(11.1) (14.2)	(6.7) (7.2)	(10.4) (6.5)	(5.6) (3.0)	(36.3) (7.5)	(79.5) (56.7)

全く飲まない	現在禁酒中	無回答	飲まない (計)
1091 (28.9)	52 (1.4)	77 (2.0)	1143 (30.3)
(17.5) (39.5)	(1.6) (1.1)	(1.3) (2.7)	(19.2) (40.6)

**b. 飲酒の機会（複数回答）（表18）**

飲酒をすると回答した2558人の飲酒の機会は「家で食事、団らん時に飲む」58.1%、「友人・同僚・上司のつきあいで飲む」38.7%、「その他のつきあいで飲む」14.6%、「寝る前に飲む」13.1%、「仕事、商売の必要で飲む」12.9%の順が多かった。「家で食事、団らん時に飲む」は男女とも30歳代以上の年代層が多かった。それに対し、「友人・同僚・上司のつきあいで飲む」は男性は20歳代が最も高率（69.6%）で、20歳未満（55.8%）、30歳代（51.3%）の順であった。女性は20歳未満（75.0%）、20歳代（65.1%）に多く、男女ともに若年層に多い傾向を認めた。「仕事、商売上の必要で飲む」は、男性の30歳代、40歳代、50歳代が多かった。

**c. あなたが、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか（表19、図5）**

「初めてアルコールを飲んだのはいつか」と質問に対し、「小学校時代」6.3%、「中学校

時代」8.2%、「中卒後18歳未満」14.7%、「18～20歳未満」37.1%、「20歳過ぎてから」29.7%であり、約70%が未成年の間に経験をしていた。

「20歳未満の人の初めての飲酒経験」は、「小学校時代」21.3%、「中学時代」35.1%であった。年代層が高くなるにつれて、初めての飲酒の経験時期が40歳代から「18歳過ぎ」が低下し、「20歳過ぎてからの比率」が上昇していた。（図5）

**d. あなたが、本格的にアルコールを飲み始めたのはいつ頃ですか（表20）**

「本格的にアルコールを飲み始めた時期」は、「小学校時代」0.1%、「中学校時代」1.1%、「中卒後18歳未満」5.2%、「18～20歳未満」29.7%、「20歳過ぎてから」57.1%であり、本格的な飲酒は大分遅い。

20歳未満の人の45.7%が「中学卒業後」と回答していたが、年齢層が高いほど「20歳過ぎてから」と回答する人が高率であった。

**表18 （アルコールをお飲みになる方におたずねします）  
最近、主にどういう機会に飲むことが多いですか（複数回答）（%）**

該当数	仕事や商売で必要	友人・上司関係	その他のつきあい	家で食事 団らん時	寝るまえに飲む
2558人 (100.0)	331 (12.9)	991 (38.7)	374 (14.6)	1487 (58.1)	336 (13.1)

仕事等で不愉快時	家庭で不愉快時	その他	無回答	回答計
72 (2.8)	45 (1.8)	63 (2.5)	51 (2.0)	3750 (146.6)

**表19 では、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか（%）**

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
2610人 (100.0)	164 (6.3)	214 (8.2)	384 (14.7)	969 (37.1)	775 (29.7)	104 (4.0)

図5 初めてアルコールを飲むの経験した時期の年齢別分布

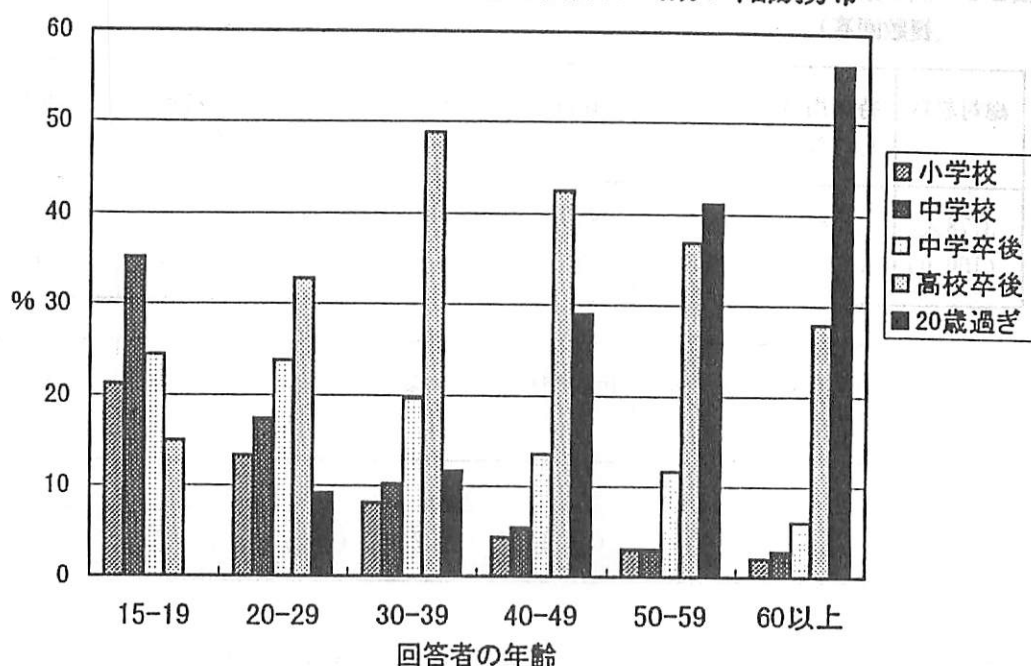


表20 あなたが、本格的にアルコールを飲んだのはいつ頃ですか (%)

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
2610人 (100.0)	2 (0.1)	28 (1.1)	135 (5.2)	776 (29.7)	1491 (57.1)	178 (6.8)

(4) 医療用薬物の使用に関する質問

1) 次の薬のうち、あなたの家庭にいつも用意しているものすべて○をつけてくださいー常備薬の種類ー(複数回答)(表21)

「特に常備薬を用意していない」と答えた人は10.7%であり、88.3%が「何らかの常備薬」を家庭に備えていた。

風邪薬76.9%、胃腸薬72.6%、湿布薬59.2%、鎮痛薬40.6%、ビタミン剤34.6%が多い常備薬であった。

これらの回答は1975年度の結果<sup>5</sup>に近似していた。

2) 次の薬のうち、あなたが常用している薬がありますかー常用薬の種類ー(複数回答)(表22)

「常用薬は特にない」と答えた人は57.8%

であり、「何らかの薬を常用している」と回答した人は35.8% (男性36.7%、女性35.0%) であり、男女とも年齢が高くなるにつれ高率で、特に50歳代44.5%、60歳以上57.0%の人が常用薬をもっていた。

常用薬は、ビタミン剤13.6%、胃腸薬11.6%、血圧の薬9.3%が比較的多い薬であった。

胃腸薬は男性に多く、ビタミン剤、鎮痛薬は女性に多い傾向を認めた。

依存性を有する治療薬として鎮痛薬1.5%、精神安定薬1.9%、睡眠薬0.8%であった。

鎮痛薬の常用者は特に年齢差はなかった。精神安定薬、睡眠薬の常用者は特に60歳以上の人に高率であり、前者で3.1%、後者で1.7%の人が常用していたと回答した。

表21 次の薬のうち、あなたのご家庭にいつも用意しているものに全てに○をつけて下さい  
(複数回答)

総対象数	特に用意 していない	用意あり (計)	風邪薬	胃腸薬	ビタミン 剤	強精強肝 薬	鎮痛薬
3778人 (100.0)	404 (10.7)	3337 (88.3)	2906 (76.9)	2743 (72.6)	1308 (34.6)	92 (2.4)	1532 (40.6)

精神安定 薬	睡眠薬	抗生物質	湿布薬	その他	無回答	回答計
181 (4.8)	117 (3.1)	251 (6.6)	2238 (59.2)	250 (6.6)	37 (1.0)	12059 (319.2)

表22 次の薬のうち、あなたが常用(週に数回以上を使用)している薬がありますか  
(複数回答)(%)

総対象数	特にない	常用あり (計)	風邪薬	胃腸薬	ビタミン 剤	強精強肝 薬	鎮痛薬
3778人 (100.0)	2182 (57.8)	1354 (35.8)	149 (3.9)	437 (11.6)	512 (13.6)	25 (0.7)	58 (1.5)

精神安定 薬	睡眠薬	抗生物質	血圧の薬	その他	無回答	回答計
70 (1.9)	31 (0.8)	29 (0.8)	352 (9.3)	224 (5.9)	242 (6.4)	4311 (114.1)

3)最近1年間に、鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用したことがありますか(表23)

質問は、薬物別に使用の有無を問うているが、表23に一括してまとめた。

a. 鎮痛薬を使用した人(表23、図6)

「最近1年間に鎮痛薬を使用したことがありますか」の間に1343人(35.5%±1.6%)が使用したと回答していた(週に数回以上使用の常用者は3.5%±0.6%)。

男性27.1%、女性43.5%であり女性の方が高

率であった。

男女とも20歳代から40歳代に比較的高い使用率を認めたが、大きな年齢差はなく、各年代層で広く使用されていた。(図6)

使用理由は「頭痛のため」63.8%と最も高率であり、「生理痛」18.5%、「頭痛、生理痛以外の痛み」17.9%であった。「遊びのため」の乱用的使用者はなかった。

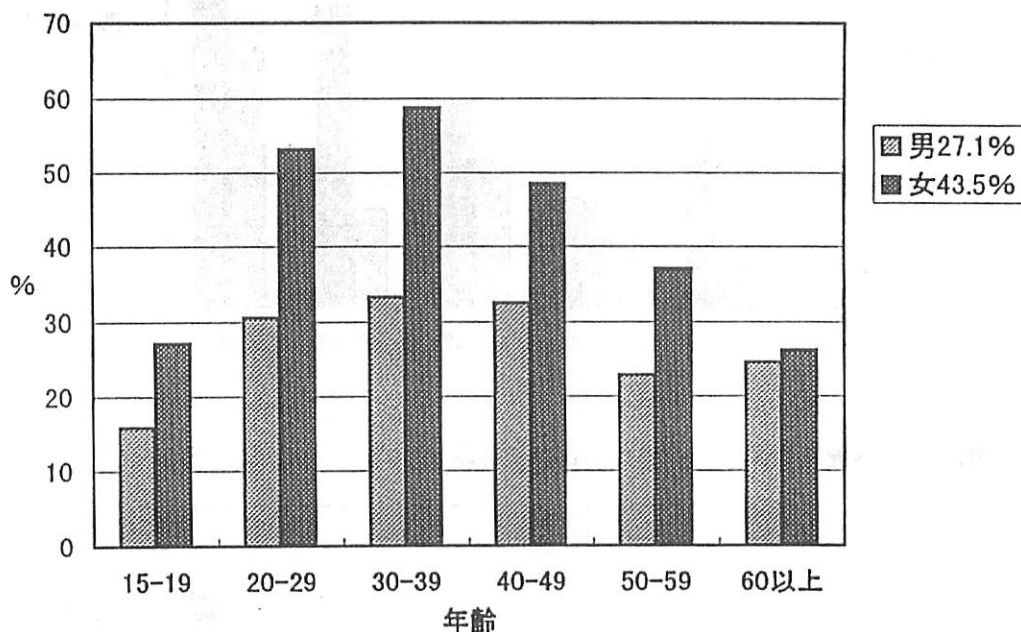
入手先は「医院・病院」41.8%、「薬局」23.6%、「家族(常備薬)から」39.9%であった。

表23 最近1年間に使用した医療用の向精神薬

薬物名	年に数回 使用	月に数回 使用	週に数回 使用	日に1～ 3回使用	日に数回 以上使用	使用者 (小計)
鎮痛薬	922 (24.4)	289 (7.6)	64 (1.7)	61 (1.6)	7 (0.2)	1343 (35.5)
精神安定薬	91 (2.4)	57 (1.5)	37 (1.0)	46 (1.2)	9 (0.2)	240 (6.4)
睡眠薬	98 (2.6)	36 (1.0)	25 (0.7)	※ 25 (0.7)	-	184 (4.9)

※睡眠薬は日に1回

図6 鎮痛薬を使用した人の性・年齢別分布



b. 精神安定薬を使用した人 (表23、図7)

「最近1年間に精神安定薬(抗不安薬)を使用したことがありますか」の問に、240人(6.4%±0.8%)が使用したと回答した(週に数回以上の使用の常用者は2.4%±0.5%)。

男性4.8%、女性7.8%と女性が高率であったが、男女とも60歳を過ぎると急激に精神安定薬の使用者が増え、男性9.5%、女性15.0%と高齢者に高い使用率を認めた。(図7)

精神安定薬の入手先は「医院・病院」88.8

%、「薬局」6.3%と医療機関が殆どであった。「家族(常備薬)」2.9%、「友人・知人」2.9%であった。

使用理由(複数回答)は、「不眠の治療」54.2%、「ストレスの軽減」18.8%、「不安の治療」15.0%、「高血圧の治療」14.2%であり、精神的、身体的疾患のの治療目的による使用であった。「遊びのため」という乱用的使用はかった。



c. 睡眠薬を使用した人（表23、図8）

「最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか」の間に、184人(4.9%±0.7%)が使用したと回答した（週に数回以上使用の常用者1.4%±0.4%）。

男性4.2%、女性5.5%と女性に多い傾向を認めた。そして男性は50歳代5.0%、60歳以上は各8.4%、女性は50歳代6.6%、60歳以上11.8%と高齢者に高い使用率を示した（図8）。

使用理由（複数回答）は「不眠の治療」73.

4%、「高血圧の治療」10.9%「不安の治療」8.2%、「ストレス軽減」6.5%、「その他身体疾患の治療」6.0%、「その他精神的苦痛改善」6.0%と何らかの精神的、身体的疾患の治療の目的が主であった。「遊びのため」という乱用的使用はなかった。

睡眠薬の入手先（複数回答）は、「病院」87.0%、「薬局」2.2%と医療機関からの入手が主であった。「家族（常備薬）」7.1%、「友人・知人」1.6%であった。

図7 精神安定薬を使用した人の性、年齢別分布

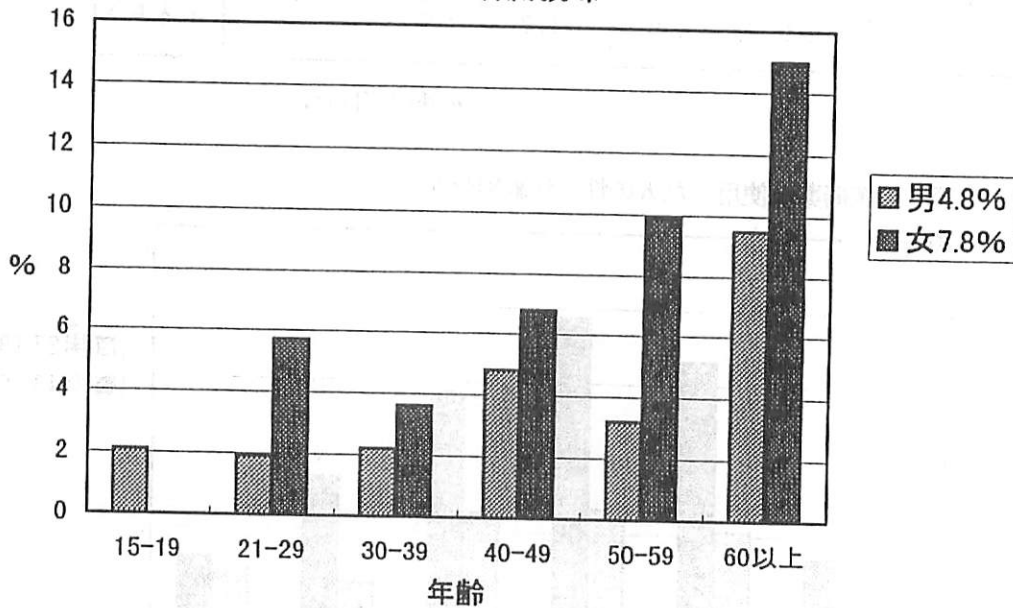
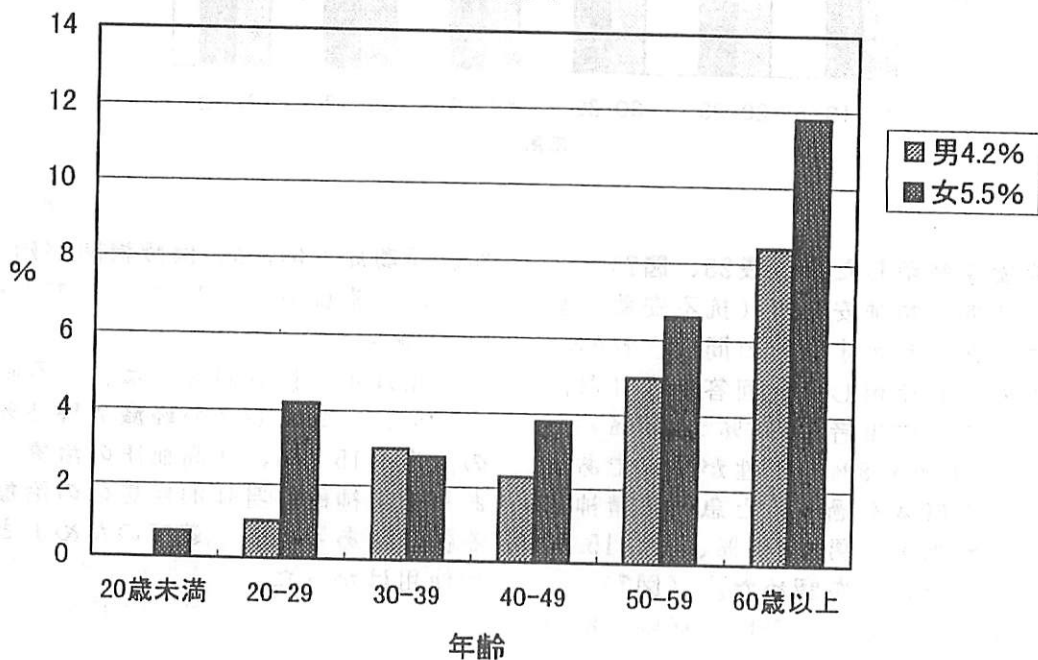


図8 睡眠薬を使用した人の性、年齢別分布



(5) 薬物乱用に関する意識調査

1) 薬物乱用という言葉を知っていますか (表24)

「詳細を知っている」7.1%、「多少知っている」42.3%であり、49.5%の人が「知っている」と回答した。

2) 次の薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけて下さい。

- 乱用薬物の名前 - (複数回答) (表25)

大麻、麻薬、覚せい剤、シンナーは90%前後の人が知っているという回答した。コカイン、モルヒネ、ヘロインは80%前後、ヒロポンは60%が知っているという回答した。トルエン41.8%、LSD 37.8%であり、特に有機溶剤22.6%、クラック16.0%は低い回答率であった。

表24 薬物乱用という言葉を知っていますか (%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	268 (7.1)	1600 (42.4)	1649 (43.6)	170 (4.5)	91 (2.4)	1868 (49.5)

表25 次の乱用薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけてください (複数回答) (%)

総対象数	大麻	モルヒネ	ヘロイン	麻薬	コカイン	L. S. D	ヒロポン	覚せい剤
3778人 (100.0)	3390 (89.7)	3080 (81.5)	2965 (78.5)	3305 (87.5)	3091 (81.8)	1428 (37.8)	2233 (59.1)	3448 (91.3)

トルエン	シンナー	有機溶剤	クラック	どれも知らない	無回答	回答計	知っている(計)
1579 (41.8)	3481 (92.1)	853 (22.6)	604 (16.0)	64 (1.7)	65 (1.7)	29586 (783.1)	3649 (96.6)

表26 乱用薬物を使用すると、依存(使用をやめたくても止められない状態)が形成されることを知っていますか (%)

総対象数	よく知っている	だいたいわかる	知らない	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	1601 (42.4)	1805 (47.8)	317 (8.4)	55 (1.5)	3406 (90.2)

3)乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか(表26)

「乱用薬物は依存を形成すること」を、「よく知っている」が42.4%、「だいたいわかる」が47.8%であり、90.2%の人が「知っている」と回答した。

4)覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思いますか(表27)

「覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題である」と3433人(90.9%)の人が「非常にそう思う」「まあそう思う」と認める回答をした。

5)「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることがある」と思いますか(表28)

「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくることがある」と考えている人は501人(13.3%)のみで、薬物乱用は自分とはあまり関係のな

い問題と捉えている人が多かった。

6)街頭や公園などで、「シンナー遊び」をしている人は以前と比較して増えたと思いますか、それとも減ったとおもいますか(表29)

「以前より増えた」13.2%、「変わらない」20.0%、「以前より減った」13.1%であった。「見たことなし」は51.6%であった。

7)「シンナー遊び」が一部未成年者の間で流行していると思いますかー有機溶剤乱用の周知度(表30)

「よく知っている」21.7%、「多少知っている」58.5%であり、80.3%が「知っている」と回答した。

8)近年、「覚せい剤」が一部未成年者の間で流行している事を知っていますか(表31)

「よく知っている」22.7%、「多少知っている」60.5%であり、83.2%の人が「知っている」と回答した。

表27 覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思いますか(%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う(小計)	思わない(小計)
3778人 (100.0)	1876 (49.7)	1557 (41.2)	221 (5.8)	55 (1.5)	88 (2.2)	3433 (90.9)	276 (7.3)

表28 「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることがある」と思いますか(%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	そう思う(小計)	思わない(小計)
3778人 (100.0)	92 (2.4)	409 (10.8)	1431 (37.9)	1779 (47.1)	67 (1.8)	501 (13.3)	3210 (85.0)

問29 街頭や公園などで、「シンナー遊び」をしている人は以前と比較して増えたと思いますか、それとも減ったとおもいますか(%)

総対象数	以前より増えた	変わらない	以前より減った	見たことなし	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	499 (13.2)	755 (20.0)	495 (13.1)	1948 (51.6)	84 (2.1)	1579 (40.0)

9)覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか(表32)

「よく知っている」22.0%、「多少知っている」61.5%であり、83.5%の人が知っていると回答した。

10)大麻について、覚せい剤、シンナーに比べて次のような意見がありますが、あなたはど  
う思いますか(表33)

「大麻は他の薬物より害がある」と回答した人19.0%、「どちらともいえない」と回答した人68.0%、「大麻は他の薬より害はない」と回答した人6.6%であった。「害はない」と回答した人は、特に20歳代(13.5%)、30歳代(15.7%)の男性に多かった。

11)覚せい剤、シンナー、大麻などの薬物を使

用うことについて、どのように考えますか(表34、図9)

「絶対に使うべきでない」と回答した人は89.5であったのに対し、「害がないなら使用してよい」1.7%、「使用かどうかは個人の自由」1.9%と使用を認める回答も少数ながら認められた。未成年者、20歳代の若年層に使用を肯定的に認める率は高く、男性にその傾向を認めた。

本年度は、これまで行ってきた「アヘン戦争」、「中南米の麻薬戦争」などの歴史的な質問を除き、最近の覚せい剤、有機溶剤乱用の状況と違法薬物使用に対する質問を加えた。

表30 「シンナー遊び」が一部の未成年者の中で流行していることを知っていますか(%)

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	820 (21.7)	2212 (58.5)	697 (18.4)	49 (1.3)	3032 (80.3)

表31 近年、「覚せい剤」が一部未成年者の中で流行していることを知っていますか(%)

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	859 (22.7)	2286 (60.5)	581 (15.4)	52 (1.4)	3145 (83.2)

表32 覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか(%)

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
3778人 (100.0)	833 (22.0)	2322 (61.5)	567 (15.5)	56 (1.5)	3155 (83.5)

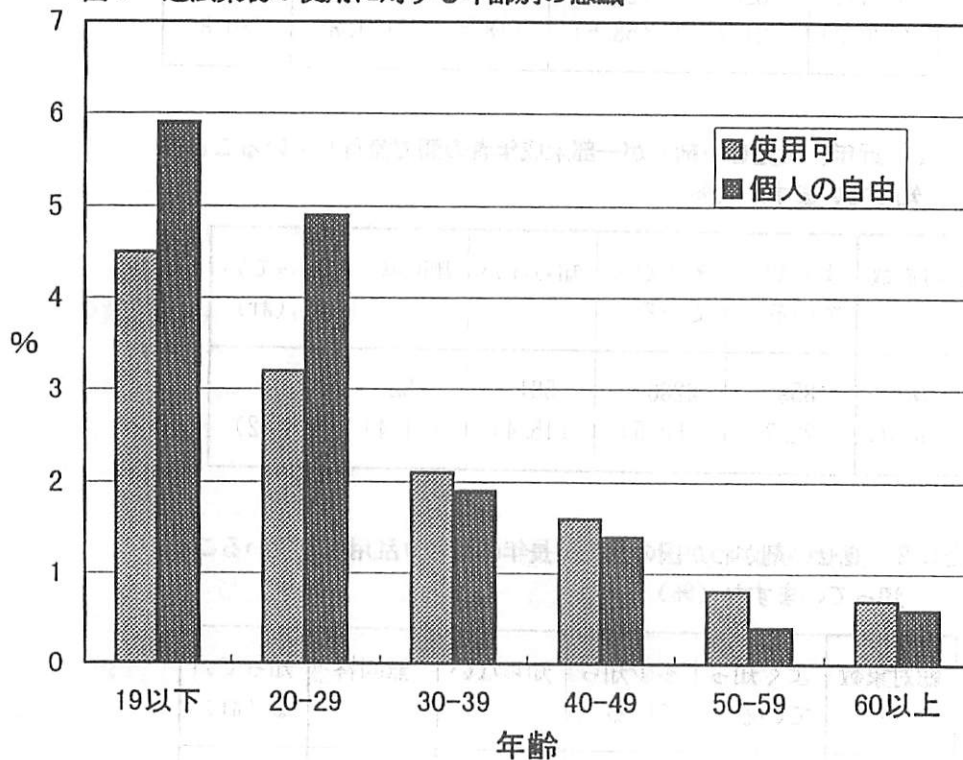
表33 大麻について、覚せい剤、シンナーなどに比べて次のような意見がありますが、あなたは、どう思いますか (%)

総対象数	大麻は他の薬より害がある	どちらともいえない	大麻は他の薬より害はない	無回答
3778人 (100.0)	716 (19.0)	2568 (68.0)	248 (6.6)	246 (6.5)

問34 覚せい剤、シンナー、大麻などの薬を使うことについて、どのようにお考えになりますか (%)

総対象数	絶対に使うべきでない	害がないなら使用してよい	使用かどうかは個人の自由	その他	無回答
3778人 (100.0)	3383 (89.5)	65 (1.7)	71 (1.9)	120 (3.2)	139 (3.7)

図9 違法薬物の使用に対する年齢別の意識



(6) 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

1)あなたは、海外旅行、出張、留学をしたことがありますか(複数回答)(表35)

海外旅行、出張、留学などで海外に滞在したことのある人は、1603人(42.4%)と回答した。その内訳は、旅行が1497人(39.6%)、海外出張148人(3.9%)、海外駐在30人(0.8%)、留学42人(1.1%)その他であった。外国に行ったことのない人は、2117人(56.0%)であった。

2)海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか(表36)

海外滞在経験者1603人中、「薬物の使用の噂を聞いた」と回答した人は112人(7.0%)、

「薬物を使用した人を知っている」の回答者は93人(5.8%)であった。比率的には「仕事で駐在」、「海外留学」など長期滞在者は高かったが、人数的には海外旅行者が多い。

3)海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか(表37)

1603人中、74人(4.6%)が誘われたことがあったと回答した。

4)海外滞在中に、あなたが使用された薬物があれば教えてください(表38)

1603人中、13人(0.8%)が薬物を使用したと回答した。大麻が最も多く11人(0.7%)、コカイン1人(0.1%)、その他の薬物が1人(0.1%)であった。

表35 あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか(複数回答)(%)

総対象数	したこと がない	海外旅行 をした	海外出張 をした	海外に仕 事で駐在	海外留学 をした	他理由で 海外生活	回答計	海外滞在 した(計)
3778人 (100.0)	2117 (56.0)	1497 (39.6)	148 (3.9)	30 (0.8)	42 (1.1)	55 (1.5)	3947 (104.5)	1603 (42.4)

表36 (海外にいったと答えた方へ)

海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか(%)

該当数	知らない	うわさを 聞いた	知ってい る	無回答
1603人 (100.0)	1366 (85.2)	112 (7.0)	93 (5.8)	32 (2.0)

表37 (海外にいったと答えた方へ)

海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか(%)

該当数	ない	ある	なんとも 言えない	無回答
1603人 (100.0)	1432 (89.3)	74 (4.6)	7 (0.4)	90 (5.6)

表38 (海外にいったと答えた方へ)

海外滞在中に、あなたが使用された薬物があれば教えてください(複数回答)(%)

該当数	使用したことなし	大麻	コカイン	ヘロイン	その他	無回答	回答計	使用した(計)
1603人 (100.0)	1454 (90.7)	11 (0.7)	1 (0.1)	- -	2 (0.1)	136 (8.5)	1604 (100.1)	13 (0.8)

表39 あなたの周囲で、薬物を乱用している(乱用していた)人を知っていますか(%)  
その薬物名も教えてください(複数回答)(%) 母数=3778

対象数	知っている(計)	1年以内で知ってる	1年以上前に知る	なんとも言えない	無回答	知らない(計)
3778	258 (6.8)	47 (1.2)	211 (5.6)	95 (2.5)	70 (1.9)	3355 (88.8)
有機溶剤	177(4.7)	24(0.6)	153(0.6)	-	-	-
覚せい剤	63(1.7)	12(0.3)	51(1.3)	-	-	-
大麻	30(0.8)	9(0.2)	21(0.6)	-	-	-
コカイン	8(0.2)	2(0.05※)	6(0.2)	-	-	-
ヘロイン	5(0.1)	2(0.05※)	3(0.08※)	-	-	-
その他	15(0.4)	5(0.05※)	10(0.3)	-	-	-
不明	28(0.7)	10(0.3)	18(0.5)	-	-	-

※統計誤差内

(7) あなたの周囲で、薬物を乱用している(乱用していた)人を知っていますか(○は一つ) -薬物乱用者の周知度-

補問. その人が使用している(使用していた)薬物は何ですか(複数回答)(表39)

問23「あなたの周囲で、薬物を乱用している(乱用していた)人を知っていますか」と問23(補問)「その人が使用している(使用していた)薬物は何ですか」をクロスし、検索したのが表39である。

設問は「最近1年以内に知っている」「1年以上前に知っていた」に分けた。

間接的に薬物乱用者の把握を目的としたものである。

「これまでに薬物を乱用した人を知っている」と回答した人は258人(6.8%)であり、「1年以内に知っている」47人(1.2%)、「1年以上前に知っている」211(5.6%)で

あった。

乱用している(乱用していた)薬物名は、有機溶剤177人(4.7%)、覚せい剤63人(1.7%)、大麻30人(0.8%)、コカイン8人(0.2%)、ヘロイン5人(0.1%)、その他15人(0.4%)薬物不明28人(0.7%)であった。

「1年以内に乱用した人を知っている」と回答した人は47人(1.2%)であった。最近の薬物乱用者と考えられる群である。

薬物別の内訳は、有機溶剤24人(0.6%)、覚せい剤12人(0.3%)、大麻9人(0.2%)、コカイン2人(0.05%)、ヘロイン2人(0.05%)その他5人(0.1%)、薬物名不明10人(0.3%)であった。

平成6年度、7年度度の調査と比べ、「1年以内の有機溶剤乱用者」、「1年以上前の有機溶剤乱用者」の認知度は共に低下していることが特徴であった。

表40 違法薬物の使用に誘われた経験の有無(%) 母数=3778

対象薬物	ない	最近1年 間にある	1年以上 前にある	なんとも 言えない	無回答	誘われた (計)
有機溶剤 (100.0)	3664 (97.0)	3 ※ (0.08)	58 (1.5)	29 (0.8)	24 (0.6)	61 (1.6)
覚せい剤 (100.0)	3673 (97.2)	- ※ (-)	15 (0.4)	13 (0.3)	77 (2.0)	15 (0.4)
大麻 (100.0)	3654 (96.7)	6 (0.16)	44 (1.2)	9 (0.2)	65 (1.7)	50 (1.3)
コカイン (100.0)	3710 (98.2)	1 ※ (0.03)	3 ※ (0.08)	5 (0.1)	59 (1.6)	4 (0.1)
ヘロイン (100.0)	3725 (98.6)	3 ※ (0.08)	3 ※ (0.08)	6 (0.16)	41 (1.1)	6 (0.16)

※統計誤差内

覚せい剤乱用者の認知度は前回2つの調査と比較して「1年以内」「1年以上」は変化を認めなかった。

大麻乱用者の認知度は「1年以内の乱用者」の認知度は変化を認めなかったが、これまでの調査と同様に覚せい剤乱用者の認知度に近い数字を示した。

コカイン、ヘロインの回答率はいずれも統計誤差の範囲であった。

(8) あなたご自身、これまでに有機溶剤、覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインなどの薬物の使用に誘われたことがありますか(表40)

設問は、有機溶剤、覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインの薬物別に「あなたは、誘われたことがありますか」となされていたが、表40に一括してまとめた。

「薬物乱用に誘う人」は薬物乱用者であり、「誘われた人」の周囲に1人ないし複数の薬物乱用者が存在すると想定して設問した。

回答は、「最近1年間に誘われた」「1年以

上前に誘われた」に分けた。

1)薬物乱用に誘われた経験(表40)

a)シンナー等有機溶剤

「シンナー等有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は61人(1.6%)で、「最近1年間に誘われた人」3人(0.08%)、「1年以上前に誘われた人」58人(1.5%)であった。

b)覚せい剤

「これまでに覚せい剤の使用を誘われた経験」と回答した人は15人(0.4%)で、「最近1年間に誘われた人」0人、「1年以上前にある」15(0.4%)であった。

c)大麻

「これまでに大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は50人(1.3%)で、「最近1年間に誘われた人」6人(0.16%)、「1年以上前にあった人」44人(1.2%)であった。

d)コカイン

「これまでにコカインの使用を誘われた」経験があると回答した人は4人(0.1%)であり、「最近1年間に誘われた人」1人(0.03



%)「1年以上前に誘われた人」3人(0.08%)であった。

e)ヘロイン

「それまでにヘロインの使用を誘われた人」6人(0.16%)であり、「1年間に誘われた人」3人(0.08%)、「1年以上前に誘われた人」3人(0.08%)であった。

「最近1年間に薬物乱用に誘われた人」は大麻を除き他の薬物は統計誤差内であった。

しかし、覚せい剤に比較して大麻に誘われた人が多いのが特徴であり、平成6年度、7年度の調査結果と一致していた。

コカイン、ヘロインの乱用は少ないことを示唆する結果であった。

2)薬物乱用に誘った人は誰か(複数回答)

(表41)

「薬物乱用に誘われた経験のある人」に、「薬物乱用に誘った人は誰か」の質問をした

a)有機溶剤に誘った人は誰か

該当者61人中、「学校の友人・知人」37人

(60.7%)と最も多く、「その他の友人・知人」26人(42.6%)が続き、「恋人(愛人)」1人(1.6%)、「見知らぬ人」3人(4.9%)であった。有機溶剤乱用には、学校の友人・知人、その他の友人・知人の影響が強いことを示唆している。

b)覚せい剤に誘った人は誰か

該当者15人中、「学校の友人・知人」4人(26.7%)、「その他の友人・知人」7人(46.7%)、「見知らぬ人」3人(20.7%)、その他であり、多くは学校外の「その他の友人・知人」から誘われ、それら仲間の影響が大きいことを示唆している。

c)大麻に誘った人は誰か

該当者50人中、「その他の友人・知人」25人(50.0%)と最も多く、「学校の友人・知人」10人(20.0%)、「恋人・愛人」3人(6.0%)、「密売人」2人(4.0%)、「見知らぬ人」10人(10.0%)などであった。学校外の「その他の友人・知人」に誘われることが半数であり、それらの仲間の影響の大きいことを示唆している。

表41 薬物乱用を誘った人は誰か(複数回答)(%)

薬物名	該当数(%)	学校の友人知人	その他の友人知人	恋人(愛人)	家族	密売人	見知らぬ人	その他
シンナー等 有機溶剤	61 (100)	37 (60.7)	26 (42.6)	1 (1.6)	-	-	3 (4.9)	-
覚せい剤	15 (100)	4 (26.7)	7 (46.7)	-	-	-	3 (20.7)	2 (13.4)
大麻	50 (100)	10 (20.0)	25 (50.0)	3 (6.0)	-	2 (4.0)	5 (10.0)	9 (18.0)
コカイン	4 (100)	2 (50.0)	3 (75.0)	-	-	-	-	-
ヘロイン	6 (100)	-	3 (50.0)	-	1 (16.7)	1 (16.7)	2 (33.3)	-

d)コカインに誘った人は誰か

該当者4人中、「その他の友人・知人」3人(75.0%)、「学校の友人・知人」3人(50.0%)であった。

e)ヘロインに誘った人は誰か

該当者6人中、「その他の友人・知人」3人(50.0%)であった。

以上の結果は、平成4年から施行した各調査結果と同様の傾向を示しており、有機溶剤は「学校の友人・知人」、覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインなどは学校外の「友人・知人」に誘われており、薬物乱用の始まりはそれらの友人・知人の影響が大きいことを示唆している。

(9)あなたは、これまでに次の薬物を使用したことがありますか—違法薬物乱用の経験の有無—(表42)(図10)

設問は、有機溶剤、覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインの薬物別に「あなたは、薬物を使用したことがありますか」とされたが、

表42に一括してまとめた。

また、これらの違法薬物を「最近1年間に」、「1年以上前に」使用を経験したかについて質問した。

1)「シンナー遊び」の経験の有無

「シンナー遊び」を経験したと回答した人は67人(1.8%)で、そのうち「最近1年間に経験した」1人(0.03%)、「1年以上前に経験した」66人(1.7%)であった。

最近1年間に使用した1人は30歳代の人であった。

「最近・過去に経験した」と回答した67人中、30歳代が26人と最も多く、40歳代18人、20歳代17人、50歳代3人であり、そして20歳未満は3人いるのみであった(図10)。

67人中、男性48人(71.6%)、女性19人(28.3%)と男性に多く認めた。

2)覚せい剤の使用経験の有無

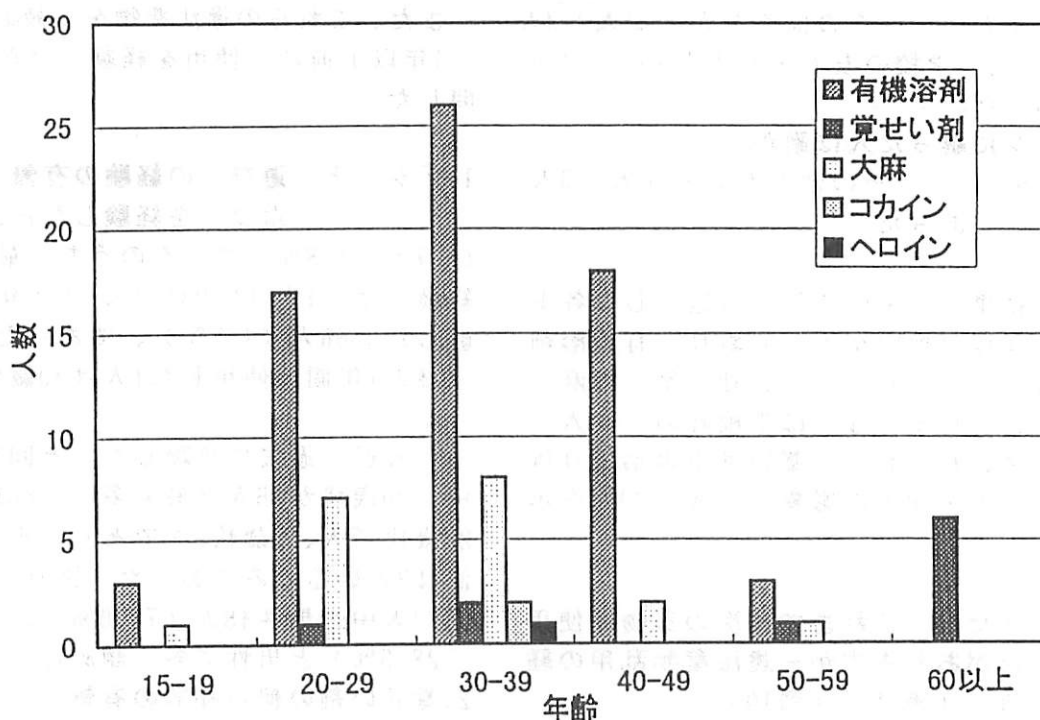
覚せい剤を経験したと回答した人は10人(0.3%)で、そのうち「最近1年間に経験した」2人(0.05%)、「過去に経験した」8人

表42 薬物乱用を経験したことの有無(率) 母数=3778

薬物名	一度も経験ない	最近1年間にしたことあり	過去に経験したことあり	無回答	経験した(小計)
シンナー等 有機溶剤	3675 (97.3)	1 ※ (0.03)	66 (1.7)	36 (1.0)	67 (1.8)
覚せい剤	3716 (98.4)	2 ※ (0.05)	8 (0.2)	52 (1.4)	10 (0.3)
大麻	3726 (98.6)	2 ※ (0.05)	17 (0.4)	33 (0.9)	19 (0.5)
コカイン	3537 (98.9)	1 ※ (0.03)	1 ※ (0.03)	39 (1.0)	2 ※ (0.1)
ヘロイン	3741 (99.0)	1 ※ (0.03)	- ※ -	36 (1.0)	1 ※ (0.0)

※統計誤差内

図10 違法性薬物の使用経験者の年齢



(0.2%)であった。

「最近1年間に使用した」と回答した人は20歳代、30歳代各1人であった。

「最近・過去に経験した」と答えた人は60歳以上6人と最も多く、30歳代2人、20歳代、50歳代各1人であった(図10)。

10人中、男性8人、女性2人と、男性が多かった。

### 3)大麻の使用経験の有無

大麻の使用を経験したと回答した人は19人(0.5%)であった。そのうち「最近1年間に経験した」2人(0.05%)、「過去に経験した」17人(0.4%)であった。

「最近1年間に使用した人」は20歳代、30歳代の各1人であった。「最近・過去に経験した人」は30歳代8人、20歳代7人と多く、40歳代2人、20歳未満、50歳代の各1人であった。20歳代、30歳代の回答者が多いのが特徴であった(図10)。

19人中、男性13人(68.4%)、女性6人(31.6%)で、女性にも浸透しており、大麻乱用の深刻さを示唆する結果である。

### 4)コカインの使用経験の有無

コカインの使用を経験したと回答した人は

2人(0.05%)であった。そのうち、「最近1年間に使用した」、「過去に経験した」が各1人(0.03%)であった。2人とも30歳代の男性であった(図10)。

コカインの社会での乱用状況はまだ不明であるが、コカインが社会に出回っていることを示唆する結果である。

### 5)ヘロインの使用経験の有無

ヘロインの使用を経験したと回答した人は「最近1年間に経験した」1人(0.03%)のみで、30歳代の男性であった。過去の調査でオピエイト系麻薬の報告はほとんどなかったが、初めて「最近の使用」の報告があった。

薬物乱用の経験率で、「最近1年間の使用経験率」は、いずれの薬物も回答率が低く、統計誤差内であるために最近の薬物乱用者の発生率を述べることは出来なかった。

しかし、平成6年度、7年度の調査結果<sup>4、5</sup>と比較することにより、国民の薬物乱用に対する意識、薬物乱用の動向などを考える重要な意義をもった資料である。

## D. 考察

平成9年度は、全国の市区町村の住民5,000人を対象に「薬物乱用・依存の世帯調査」を施行した。調査結果の一部は平成6年度の東京・大阪・北九州圏の調査結果、平成7年度の全国の調査結果と比較しながら考察をする。

なお、研究課題が「薬物乱用・依存の世帯調査」となっているが、調査は世帯の一人を調査したものであって正確には「薬物乱用・依存の住民調査」とすべきであることをお断りしておく。

### 1. 世帯（住民）調査の意義

平成4年度厚生科学研究費補助金麻薬等対策総合研究事業の一つとして「薬物乱用・依存の世帯調査」の実施の機会を得て市川市民1,100人を対象に薬物乱用・依存に関する世帯調査<sup>2</sup>を開始し、調査内容、調査方法を研究した。それを参考にしながら平成5年度は東京圏・大阪圏の住民3,000人<sup>3</sup>、平成6年度は東京・大阪・北九州圏の住民3,300人<sup>4</sup>と調査地区と対象を拡大しながら、平成7年度の全国の5,000人<sup>5</sup>と初めて全国的、本格的な調査を施行した。

各年度の調査において、質問内容、回収方法などを検討してきたが、本年度の2回目の全国的、本格的な調査を施行した。

#### (1) 調査方法

平成4年度の市川市民の調査<sup>2</sup>に先立ち、調査員10人が訪問留置法、直接面接法でそれぞれ5件ずつの対象を受け持ち、計100人の予備調査を施行したが、特に覚せい剤、有機溶剤、大麻などの違法薬物の使用経験の有無に対する質問事項では直接面接法より、訪問留置法の方が適しているとの結論を得た。この予備調査より、平成4年度の調査<sup>2</sup>より個別訪問留置法を採用してきた。

なお、対象の抽出法は層化2段無作為抽出法を用いている。個別訪問留置法では、層化2段無作為抽出法が最も正しい抽出法であり、調査結果は信用できるものとする。

先の研究方法のB-2標本抽出法(p2)にて詳述したように、地区・都市規模別各層における母集団数の大きさにより、5,000の標本数を比例配分し(層化の作業)、調査地点と調査地点における対象者を統計法にのっとり

無作為に抽出したものである。

平成5年度、平成6年度の調査<sup>3,4</sup>は調査圏の標本数を各圏に等配分し、各圏内にて層化2段無作為抽出法で対象者を抽出したものであった。統計的には必ずしも正しいといえない。平成7年度<sup>5</sup>と本年度の調査は、その意味においては層化2段無作為抽出法にのっとり施行された本格的調査であり、統計的にも意義があると信じる。

#### (2) 回収率

これまでの回答率は、平成4年度73.8%<sup>2</sup>、平成5年度70.8%<sup>3</sup>、平成6年度73.2%<sup>4</sup>そして平成7年度は78.9%<sup>5</sup>と最も高い回答率であった。

本年度は75.6%の回収率であった。同じ全国調査の平成7年度<sup>5</sup>に比べ回収率は低下していたが、調査期間が12日間短く、調査が12月にまたがったことが関係していると考え、今後の参考にしたい。

しかし75%をこえる高い回収率は、わが国でも薬物乱用・依存の住民調査が可能であることが判明した。

#### (3) 調査内容

調査内容は、違法薬物乱用の実態のみならず、日常生活のあり方、喫煙・飲酒など嗜好品の使用状況、家庭における常備薬、睡眠薬など医療用向精神薬の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に関する意識など多岐にわたっている。これは直接に違法薬物の使用を質問するよりは、日常生活の問題から徐々に主目的の違法薬物へと質問がなされる方が回答を得やすいと考えたからである。しかしこれらの調査結果は、国民の保健保健、学校保健を考える上でも貴重な資料であり、他省庁、他施設においてこれらの資料を用いることを期待する。

この調査の最大目的は、覚せい剤など違法薬物の乱用発生率の把握である。しかし、米国のように国民の10数%が違法薬物の使用経験者であり、薬物使用に対する価値観が異なる国では容易であるが、わが国のように発生率が1%をはるかに下回り、薬物乱用に対する価値観、容認度の厳しい国では把握が難しい。

その問題を補うため、住民の周囲に存在する

乱用者の周知状況、住民自らが乱用に誘われた経験など間接的な調査結果を交えて総合的に検討することにより、現在の乱用者の発生率と実態を把握が可能となると考える。

全国的、本格的な「薬物乱用・依存に関する世帯（住民）調査」はやっとスタートしたばかりである。今後、経年的に全国調査を実施することにより、わが国の薬物乱用の実態と動向の把握と、それに基づく薬物乱用・依存の教育、啓発、予防そして治療対策を考える貴重な資料となりうるであろう。

## 2. 日常生活に関する質問について

調査対象者に、最近1年間の健康状態や日常生活について質問した。

「健康状態がよくない」と回答した人は16.5%に認めたが、当然ながら高齢者に高率に認めた。50歳代で5人に一人、60歳以上で4人に一人が何らかの精神的・身体的不調を感じていた。それらの人たちに精神安定薬、睡眠薬の常用が多かった。

入眠障害、途中覚醒などを「週に1-2回・3回以上」も経験する「睡眠障害」は10.6%の人に認めたが、高齢になるにつれて増え、60歳以上の人に高率に認めた。睡眠問題については、これまでは一部の研究者を除いて関心をもたれてこなかったが、睡眠障害は身体的・精神的疾患には伴うものであり、高齢化社会を迎えるにあたり医療のみならず福祉の分野でも研究されなければならぬ課題であろう。

一方、若年層により問題があるのは、「日常生活・活動に意欲がない」の回答率が29.4%なのに対し未成年者は38.0%と高率であり、「毎日の仕事（家事、勉強）がうまくいかない」の回答率が39.0%なのに対し未成年者は59.2%であった。

高齢層に「現在の生活に満足している」と感じている人が高率であった。

これは若年層は自己の確立がまだ不十分で、生活に自信がない結果であり解決される問題である。

また、週に1-2回・3回以上も「眠りすぎたり、昼間眠くてたまらないことがある」の回答率は12.4%であったが、未成年者は29.3%と高率であった。若年層の夜更かし、不規則な生活がもたらす結果と考える。

日常生活、健康状態の質問は、高齢層、若年層にそれぞれの特徴があったが、回答率、傾向ともに平成7年度の調査結果と非常に似ていた。

この種の調査は回答者が正しく回答してくれる事を前提にして行われるが、平成4年度から始まった世帯調査の日常生活の調査結果を比較検討すると質問ごとの結果と年齢構成は一つの傾向を示していた。回答者のほとんどが真面目に対応してくれていると考える。

## 3. 嗜好品

### (1) 喫煙

#### 1) 15歳以上の男女の喫煙率は32.7%

15歳以上の男女の喫煙率は、32.7%（男性51.7%、女性15.0%）であった。平成7年度の調査結果<sup>5</sup>と同率であったが、男性は1.6ポイント低下し、女性は1.1ポイント上昇していた。

平成8年5月に、日本たばこ産業株式会社が、全国の20歳以上の16,000人を対象に喫煙者の実態調査を施行しており、11,200人の有効回収標本より喫煙率35.1%（男性57.5%、女性14.2%）と報告している（平成9年5月の調査結果の報告はまだなされていない）。われわれの調査で20歳未満を除いた20歳以上の成人の喫煙率は33.9%±1.5%（男性54.0%、女性15.3%）であり、たばこ産業の調査結果とほぼ一致している。

#### 2) 喫煙者の70%が禁煙したいと願っている

喫煙者の42%が「禁煙をしたいが実行していない」、28%が「禁煙に失敗した」と回答しており、喫煙者の70%が禁煙をしたいと願っていた。

平成7年度の調査<sup>5</sup>では66%であり、禁煙希望者が若干増加していた。

喫煙者の多くは禁煙したいと考えながら喫煙を続けているのが実態であり、これはたばこ産業株式会社の調査にない資料である。

#### 3) 近年、禁煙中の人増加している

現在禁煙中の人増加しているのは調査対象者の14.1%（男性20.4%、女性8.2%）であった。男性は30歳代から増加し、60歳以上は34%に達している。女性は20歳、30歳代に多かった。

男性は健康上の理由で、女性は妊娠、育児との関係で禁煙したものが多いと考える。

平成7年度の調査(12.8%)に比べ上昇していたが、近年、喫煙と健康、受動喫煙、喫煙の低年齢化など喫煙に対する社会的容認度が厳しくなっていることも関係していよう。

たばこの宣伝、自動販売機など発売方法について真剣に考えていかねばならぬ課題である。また、啓発、教育に加えて、医療の中でニコチンガムなどを利用した禁煙法の普及が望まれる。

#### 4) 喫煙の低年齢化の進行

15-19歳の未成年者の喫煙率は17.8% (男性24.8%、女性10.6%)であった。

平成7年度の調査では12.8% (男性22.5%、女性3.7%)であり、未成年者の喫煙率は特に女性が上昇しており、近年の若年女性喫煙者の増加を裏付ける結果であった。

未成年者が喫煙を初めて経験した時期は小学校、中学校が40%を占めていたが、本格的に喫煙をするのは大分遅れてからであった。小学校高学年からニコチン、アルコールを含めた依存性物質の教育を小学校高学年から始める必要がある考える。

#### (2) 飲酒

##### 1) 飲酒率は68%

1年の間にアルコールを飲んだという人は68% (男性81%、女性57%)であったが、男性は「週に2~3回」以上の習慣飲酒者が多いのに対し、女性は「月に1~2回」以下の機会的飲酒者が多かった。「ほとんど毎日飲む人」は、男性は40歳代(42%)、50歳代(52%)に、女性は20歳代、30歳代、40歳代がそれぞれ8%と多かった。

##### 2) 若年層は付き合いで、中高年層は家庭で

男女とも中高年層は家庭で、中年の男性は仕事上の付き合いで、若年層は男女とも友人・仲間の付き合いで飲酒をする機会が多く、最近の世相を示している。

##### 3) 未成年者の本格的飲酒は18歳過ぎが多い

未成年者の飲酒開始年齢が低年齢化していると言われているが、未成年者が本格的に飲酒を開始するのは中卒後が46%、高卒後が21%であり、喫煙に比べ大分遅い。未成年者にとり先ず喫煙から始まり、飲酒へと進んでいく課程が示されていた。

#### 4. 常備薬、常用薬について

##### (1) ほとんどの家庭で常備薬を備えていた

88%の家庭で「何らかの常備薬」を備えていることが判明した。

風邪薬、胃腸薬、湿布薬、鎮痛薬などが主な家庭常備薬であり、軽い症状の場合は家庭で対応しようとする姿勢がうかがわれた。

ビタミン剤も比較的多い常備薬であり、治療以外に健康保持が目的かと考える。

##### (2) 加齢とともに薬を常用する人が増加

治療、健康保持の目的で何らかの薬を常用している人は約36%に認められた。男女とも年齢が高くなるにつれ高率で、50歳代(45%)、60歳以上(57%)に多かった。

高年者が精神的、身体的に問題が多くなることを考えれば当然のことであるが、風邪薬、胃腸薬、抗圧剤、ビタミン剤、精神安定(抗不安)薬、睡眠薬が加齢とともに増加していた。なお、鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を常用している人の比率は、後述の薬物別の使用状況の常用率より低率であった。

#### 5. 鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬の使用状況

これまで鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬らの使用状況について医療施設からの報告はあったが、全国の住民を対象にした調査の報告はなされていない。

平成7年度の世帯調査<sup>5)</sup>がわが国の初めての報告である。

鎮痛薬、精神安定薬そして睡眠薬はかつて社会で乱用された時期があり、依存性を有する薬物でもあるので、詳細に使用状況を検討した。(注:依存を形成しない鎮痛薬もある)

##### (1) 年間の鎮痛薬使用者は3千7百万人

「最近1年間に鎮痛薬を使用した人」を使用者とし、その中で「週数回以上使用した人」を常用者とした。

使用率: 35.5% (男性27.1%、女性43.5%)

常用率: 3.5% (男性2.2%、女性4.8%)

(平成7年度は使用率34.9%、常用率3.2%)

使用者は女性に多いが、男女とも20歳代から40歳代に比較的高い使用率を認め、広い年齢層で使用されていた。

使用理由は頭痛の改善が最も多く、生理痛、その他の痛みの改善などであった。

医院・病院から入手する人、薬局で求める人、そして家庭に備えている常備薬を使用す

る人などそれぞれの症状に合わせて入手していた。

15歳以上の男女が1億5百万人いることから換算すると、1年間に鎮痛薬を使用したことのある人は3570~3885万人、週に数回以上使用の常用者は346~388万人である。

**(2) 年間の精神安定薬使用者は670万人**  
精神安定薬の使用率、常用率は以下のとおりである。

使用率： 6.4% (男性 4.8%、女性 7.8%)

常用率： 2.4% (男性 2.4%、女性 2.5%)

(平成7年度は使用率6.1%、常用率2.6%)

使用者は女性に高率に認め、男女とも60歳を過ぎると急激に精神安定薬の使用者が増え、男性9.5%、女性15.0%と高齢者の高い使用率が特徴であった。

使用理由は「不眠の治療」が過半数をこえ、「ストレス」「不安」「高血圧」、その他の精神的・身体的疾患の治療などであった。「遊びのため」という乱用的使用の回答はなかった。

入手先は医院・病院が90%近くを占めていたが、薬局から6%に認めたが、薬局ではベンゾジアゼピン系薬物は販売されておらず、漢方系精神安定薬かと推察する。

家族(常備薬)、友人・知人からの入手を若干認めたが詳細は不明である。

15歳以上の男女が1億5百万人いることから換算して、1年間に精神安定薬を使用した人は588~756万人、週に数回以上使用の常用者は241~262万人いると考える。

**(3) 年間の睡眠薬使用者は510万人**

睡眠薬の使用率、常用率は以下のとおりである。

使用率： 4.9% (男性 4.2%、女性 5.5%)

常用率： 1.4% (男性 1.3%、女性 1.4%)

(平成7年度は使用率4.7%、常用率1.6%)

使用者は女性に高率の傾向を認め、男女とも60歳を過ぎると睡眠薬の使用者が増え、男性8%、女性12%と高齢者の高い使用率が特徴であった。

使用理由は「不眠の治療」73%、高血圧、不安、ストレス、その他の精神的・身体的疾患の治療過などであった。「遊びのため」という乱用的使用の回答はなかった。

入手先は医院・病院が87%と最も多く占め、薬局から2%に認めた。薬局ではプロムワレリル尿素系睡眠薬が主と考える(薬局ではプロムワレリル系薬剤の販売が許可されている)。家族(常備薬)、友人・知人から入手が若干認めが詳細については不明である。

15歳以上の男女が1億5百万人いることから換算して、1年間に睡眠薬を使用した人は441~588万人、週に数回以上使用の常用者は136~157万人いると考える。

**(4) 医療用向精神薬の乱用が少ないのはなぜ?**

平成7年度<sup>5</sup>と比較して鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬の使用率(常用率)に大きな変化は認めなかった。しかし、この調査は一般住民を対象に施行されたものでありこの使用率(常用率)は意義があると考えられる。

非常に多くの人々が向精神薬を使用しているが、精神安定薬、睡眠薬は精神科だけでなく、精神科以外の広い診療科の臨床で精神・身体的疾患にも用いられている。

この調査から、医療用向精神薬の乱用者を同定する事はできなかった。

昭和30年代後半に一部の青少年による「睡眠薬遊び」が流行し、40年代は鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬が乱用薬物の主なものであった。

最近、尾崎、福井らが施行してきた全国の精神科医療施設の実態調査<sup>10</sup>によると、鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の医療用向精神薬依存者の発生率は覚せい剤、有機溶剤に比べて著しく低率であり、医学的に社会的に問題になっていない。昭和40年代に比べ、薬局で販売している鎮痛薬の成分が代わったこと(鎮痛効果をたかめるための薬剤がバルビツレート系薬剤からプロムワレリル尿素系薬剤に換えている)、精神安定薬、睡眠薬のほとんどが依存性の低いベンゾジアゼピン系薬物になったこと、依存性を有する向精神薬が要指示薬になったことなどが、向精神薬乱用・依存の低い発生率の原因になっていると考える<sup>7</sup>。

**6. 薬物乱用に関する意識調査 - 20歳未満の10%が違法性薬物の使用に肯定的 -**

薬物乱用に関する意識調査は、本年度から「あへん戦争」、「中南米の麻薬戦争」などの歴史的な質問は除き、最近の覚せい剤、有

機溶剤乱用状況や覚せい剤などの違法性薬物使用に対する意識などの質問を加えた。

薬物乱用問題に関する認識度の質問について、「シンナー遊び」、「覚せい剤乱用」がわが国の主要な薬物乱用問題であり、長年にわたり大きな社会問題になっており、一般人に広がりつつある危険な状況にあることは認識しているが、それらの問題は自分とは関りのない出来事と考えている人が多かった。これまでの調査と同じ結果であった。

違法性薬物の使用に関しては、「害がないなら使用してもよい」1.7%、「使用するどうかは個人の自由」1.9%と3.7%の人が違法性薬物の使用について肯定的な考えを持っていた。特に15-19歳は10.4%、20歳代は8.1%の若年層が薬物の使用に肯定的であった。

薬物乱用の一般的知識は持っているても、真の弊害の知識に欠けていると考える。今後、ニコチン、アルコールを含めた依存性物質についての学校教育、啓発・啓蒙のあり方を根本的に再検討する必要がある。一部の都道府県ですで行われているが、教育の現場に麻薬取締官、警察官や薬依存者の治療にあっている精神科医などが参加することも一つの方法かもしれない。

## 6. 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

### — 海外旅行が大麻乱用の引き金に！ —

近年、海外との交流が盛んになるにつれて海外旅行、出張、留学、駐在を経験する人が増加している。その一部の人に大麻、コカインなどの違法薬物を経験する人がいると言われている。そこで海外旅行、滞在と薬物乱用の関係について質問を行った。

調査では、旅行、出張、仕事で駐在、留学

などで海外に滞在したことがある人は1603人(42.4%)であり、平成7年度を上回った。(平成7年度 35.8%)

そのうち、海外滞在中に「周囲で薬物を使用している人」を知っているとの回答は93人(5.8%)から得た。(平成7年度 3.8%)

「自らが薬物の使用に誘われた人」は74人(4.6%)であることが判明した。(平成7年度 3.0%)

海外滞在中に薬物を使用した人は13人(0.8%)であり、(平成7年度 0.7%)特に大麻の経験者が11人であった。(平成7年度8人)

海外旅行など海外に出かける人は多くなっているが、海外で薬物乱用に誘われたり、自らが薬物の使用を経験する機会が多いことを示唆する結果であった。

海外での経験が、帰国後の大麻、コカイン乱用の誘因となる例が多い。事実、後述の国内での大麻経験者は海外で生活を経験した人が多かった。

## 7. 違法薬物乱用・依存者について

### (1) 周囲で薬物を乱用している人の周知度 (表43)

「周囲で薬物乱用をしている人を知っているか」の質問に対し「1年以内に乱用した人を知っている」、「1年以上前に乱用した人を知っている」の回答を設けたのは、平成6年度<sup>4</sup>からであり、調査地区、調査対象数は異なるが平成6年度<sup>4</sup>と全国調査の平成7年度<sup>5</sup>及び今年度の調査結果を比較した。(表43)

#### 1) 有機溶剤乱用者を知っている人

平成9年度の調査で、有機溶剤を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.6%、「1年以上前に乱用していた人」の周知率は

表43 平成6年度、7年度、9年度の薬物乱用者の周知度の比較 (%)

年 ＼ 薬	1994年 (2,415人)		1995年 (3,946人)		1997年 (3,778人)	
	1年以内 に知る	1年以上 前に知る	1年以内 に知る	1年以上 前に知る	1年以内 に知る	1年以上 前に知る
有機溶剤	52(2.2)	156(6.5)	39(0.9)	170(4.3)	24(0.6)	153(4.0)
覚せい剤	8(0.3)	34(1.4)	13(0.3)	55(1.4)	12(0.3)	51(1.3)
大麻	4(0.16)	20(0.8)	10(0.25)	32(0.8)	9(0.2)	21(0.6)
コカイン	2(0.08)	4(0.16)	5(0.14)	9(0.21)	2(0.05)*	6(0.16)
ヘロイン	1(0.04)	4(0.16)	1(0.02)*	3(0.08)	2(0.05)*	3(0.08)*

\*誤差範囲内



4.0%であった。平成7年度<sup>5</sup>に比べ特に最近1年以内の乱用者の周知率は低下傾向を示している。特に平成6年度の結果<sup>4</sup>と比較すると顕著である。

警察庁<sup>6</sup>は平成4年、5年の有機溶剤乱用少年の検挙者が前年に比べ5千人も減少し、その後も平成6年、7年、8年と減少していると報告している。尾崎<sup>10</sup>は平成8年度の精神科医療施設、阿部<sup>1</sup>は教護院の実態調査で近年の有機溶剤乱用者の減少を報告した。

この調査結果は、調査対象者の生活の周囲で有機溶剤乱用者が目立たなくなったことがこの数値となって現れたものと考えられる。

## 2)覚せい剤乱用者を知っている人

覚せい剤を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.3%で平成6年度、7年度の結果<sup>4、5</sup>と同じであった。「1年以上前に乱用していた人」の周知率は1.3%で、平成6年度、7年度の結果とほとんど同率であった。

厚生省<sup>9</sup>は、それまで覚せい剤事犯検挙者は1万5千人前後と横這い状態であったが、平成7年は17,364人、8年は19,666人と増加に転じたと報告している。

しかし、調査結果は有機溶剤のように反応を示していない。覚せい剤の使用は有機溶剤に比べ犯罪的であるとの意識が強く、密室的な行為となり、目立たないことが周知率の低さに影響していると考えられる。

## 3)大麻乱用者を知っている人

大麻を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.2%で覚せい剤乱用者の周知率に比較的接近していた。これは平成6年度、7年度の結果<sup>4、5</sup>も同様の傾向を示していた。

これは大麻の潜在的乱用者は考えられてい

る以上に多いことを示唆している。

## 4)コカイン乱用者を知っている人

コカインを「最近1年間に乱用していた人」の周知率は0.05%であり統計誤差範囲内であり、評価出来ない。

有機溶剤、覚せい剤、大麻に比べコカイン乱用者は少ないことを示している。

## 5)ヘロイン乱用者を知っている人

ヘロインを「最近1年間に乱用していた人」の周知率は0.05%であり統計誤差範囲内であった。コカインと同様に社会でのヘロイン乱用は少ないことを示唆していた。

「回答者の周囲で薬物を乱用している人を知っているか」の質問は、間接的であるが乱用者をとらえる一つの方法である。

その情報は噂など風聞によるものもあるが、乱用者が友人・知人である可能性もある。

薬物乱用者の発生率の把握は非常に難しい。いくつかの指標を総合して把握できる。

その意味において、薬物乱用者の周知度は「最近の乱用者」の発生率を知る指標の一つであり、上限になると考える。

## (2)違法薬物の使用に誘われた経験(表44)

「あなたは薬物の使用に誘われたことがあったか」との間接的な質問は、わが国の薬物乱用をめぐる状況を考えると、乱用者の実態把握に効果的ではあると思う。

### 1)最近1年間に薬物の使用に誘われた経験者は少数

「最近1年間に薬物の使用に誘われた経験者」は、いずれの薬物も少数で、有機溶剤は3人、覚せい剤は0人、大麻は6人、コカイン、ヘロインは各1人であった。

表44 平成6年度、7年度、9年度の薬物乱用に誘われた人の比較(%)

年 ＼ 薬	1994年(2,415人)		1995年(3,946人)		1997年(3,778人)	
	最近1年 にある	1年以上 前にある	最近1年 にある	1年以上 前にある	最近1年 にある	1年以上 前にある
有機溶剤	3(0.1)	34(1.4)	6(0.2)	63(1.6)	3(0.08)*	58(1.5)
覚せい剤	1(0.04)	7(0.3)	2(0.05)*	21(0.5)	— *	15(0.4)
大麻	3(0.1)	25(1.0)	7(0.2)	34(0.9)	6(0.16)	44(1.2)
コカイン	—	—	2(0.05)*	6(0.2)	1(0.03)*	3(0.08)*
ヘロイン	—	1(0.04)	—	6(0.2)	3(0.08)*	3(0.08)*

\*誤差範囲内

サンプル数3778に対する比率を以下に示す。

- 有機溶剤 0.08% ± 0.1%
- 覚せい剤 0%
- 大麻 0.16% ± 0.1%
- コカイン 0.03% ± 0.1%
- ヘロイン 0.03% ± 0.1%

大麻を除き、いずれも統計誤差範囲内で、数値を統計的に評価することは難しかった。

「大麻に誘われた」と回答した人が最も多かったが、平成6年度<sup>4</sup>、7年度<sup>5</sup>でも同じ傾向を示していた(表44)。

それに対し、今年度は「覚せい剤に誘われた」と回答した人はなく、平成6年度<sup>4</sup>、7年度<sup>5</sup>でも大麻より少ない。

回答者にとり、覚せい剤は犯罪性のイメージが強く「誘われた」と回答にくいこと、大麻はより犯罪性がなく、ダークなイメージが少ないために回答し易いことが考えられる。しかし、それらの条件を考慮しても、大麻が確実に社会に浸透しており、潜在的乱用者がわれわれの予想以上に多いことを示唆した結果と考える。

少なくとも、平成8年の覚せい剤事犯検挙者19,666人<sup>9</sup>、有機溶剤事犯検挙者6,848人<sup>9</sup>、大麻事犯検挙者1,306人<sup>9</sup>の比率以上に多いのではないかと推察する。

コカインは、過去3回の調査では出現してこなかったが、平成7年度<sup>5</sup>で初めて「誘われた」との回答者が認められた。目立たないが少しずつ社会に浸透していると考えられる。

ヘロインなどオピエイト系麻薬の乱用は、わが国では一部の人たちに乱用されており、表面化していないことを示唆している。

## 2)薬物乱用の始まりは乱用者の友人・知人の影響が大きい

「違法薬物の使用を誘った人は誰か」の質問に対し、有機溶剤は「学校の友人・知人」と回答した人が多かった。中学時代の友人の誘いが多いことが考えられる。

覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインなどは学校以外の「その他の友人・知人」と回答した人の比率が高かった。有機溶剤と異なり、年齢が長じて学校以外の遊び友達の影響が大きいのであろう。

有機溶剤、覚せい剤などの流行病型薬物乱用の伝播は乱用者から乱用者へと行われることが多く、薬物乱用に誘った人は薬物乱用者である可能性が高い。薬物の使用を誘われた人の周囲には、1人ないし複数の乱用者が存在していると考えられる。薬物乱用に誘われた経験者を知ることは、わが国の薬物乱用に対する国民の意識を考えたとき、薬物乱用の実態を把握する重要な指標になるであろう。

### (3) 過去、現在の違法薬物使用の経験

「対象者自身が、違法薬物使用の経験があるか」の質問をした。

#### 1) 最近1年間に薬物の乱用の経験者(表45)

「最近1年間に使用した経験あり」と回答した人は非常に少なく、有機溶剤1人、覚せい剤2人、大麻2人、コカイン、ヘロイン各1人であった。

サンプル数3,788の比率を以下に示す。

- 有機溶剤 0.03% ± 0.1%
- 覚せい剤 0.05% ± 0.1%
- 大麻 0.05% ± 0.1%
- コカイン 0.03% ± 0.1%
- ヘロイン 0.03% ± 0.1%

表45 平成6年度、7年度、9年度の薬物乱用を経験した人の比較(%)

年 薬	1994年(2,415人)		1995年(3,946人)		1997年(3,778人)	
	最近1年 間に経験	1年以上 前に経験	最近1年 間に経験	1年以上 前に経験	最近1年 間に経験	1年以上 前に経験
有機溶剤	2(0.1)	39(1.6)	3(0.07)*	54(1.4)	1(0.03)*	66(1.7)
覚せい剤	1(0.04)	6(0.2)	2(0.05)*	10(0.3)	2(0.05)*	8(0.2)
大麻	3(0.1)	10(0.4)	2(0.05)*	15(0.4)	2(0.05)*	17(0.4)
コカイン	-	-	2(0.05)*	1(0.0)*	1(0.03)*	1(0.03)*
ヘロイン	-	1(0.0)	-	1(0.0)*	1(0.03)*	-

\*誤差範囲内

経験者率はいずれの薬物も統計誤差内であり、数値を評価することはできなかった。平成6年度<sup>4</sup>、7年度<sup>5</sup>の結果も同様の傾向であるが(表45)、比較すると最近の有機溶剤乱用は下火傾向にあること、覚せい剤、大麻乱用は依然として続いていること、コカイン、ヘロイン乱用は一部で存在していることなどが考えられる。

平成4年度、5年度の調査<sup>2,3</sup>では「1年以内の使用経験者」の回答を得ることが出来なかった。これは「最近1年間に以下の薬物の使用を経験したことがあるか」の質問に対し、回答を「最近1年間に何回も経験あり」、「過去に何回も経験あり」、「過去に経験あり」、「1度も経験なし」と「何回も」を強調したことが関係しているかと考えた。

そして、平成6年度より、回答を「最近1年間に経験したことあり」、「過去に経験した」、「1度も経験したことなし」と変更したこと、回収方法をかえたことなどが少数ながらも回答を得ることができたと考える。設問のもち方、回収方法など検討しながら調査をしていく必要があるだろう。

しかし、国民感情、世論を反映して、使用経験者が「使用した」と回答することに抵抗を感じ、防衛的になっていることが回答者の少ない原因であると推察する。

## 2) 現在・過去の薬物乱用経験者の年齢別比率—薬物に対する価値観の変化—(図11)

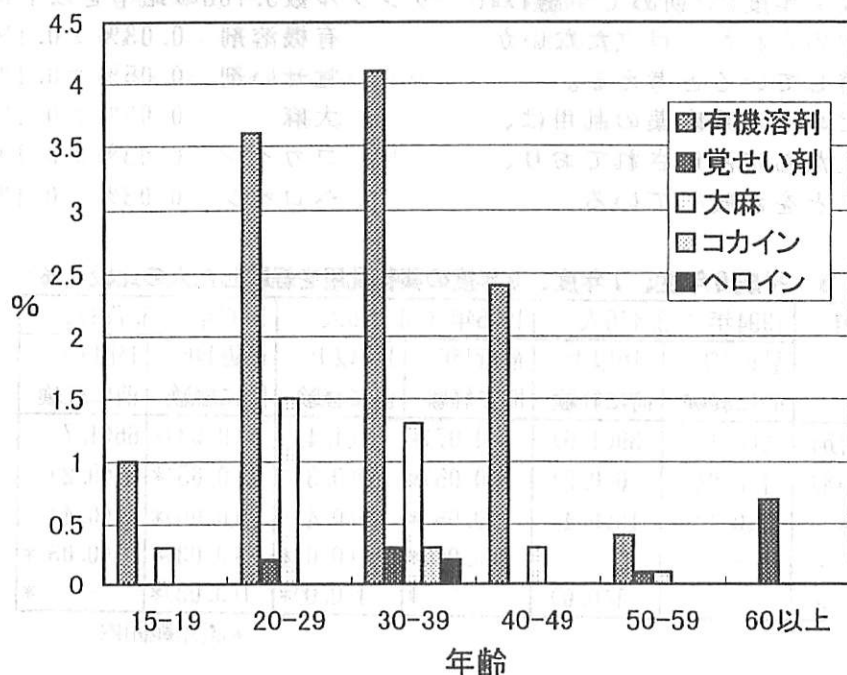
### a) 有機溶剤

有機溶剤を最近・過去に経験したと回答した人は67人いたが、20歳未満3人(0.1%)、20歳代17人(3.6%)、30歳代26人(4.1%)、40歳代18人(2.4%)、50歳代3人(0.4%)であった(最近1年に使用した人は30歳代の1人)。20代、30代、40代の回答率が高かったが、過去の有機溶剤乱用の流行を示唆する結果である。有機溶剤は、未成年者の乱用物質として長年にわたり乱用されており、彼らにとり身近な存在でもあった。過去の乱用者にとっても罪業観も少なく、回答しやすいことがこの結果になったと考える。

### b) 覚せい剤

覚せい剤を現在・過去に乱用したと回答した人は10人で60歳以上は6人(0.7%)、30歳代2人(0.3%)、20歳代1人(0.2%)、50歳代1人(0.1%)であった(現在の乱用者は20歳代、30歳代各1人)。60歳以上の人の回答が最も多く、乱用者の主な年代層の20歳代、30歳代の回答が少ないのが特徴であった。60歳以上の人は昔のこととして回答しやすかったが、現在も乱用の中心的年代の20代、30代の人には回答しにくかったと考える。

図11 違法薬物使用経験者の年齢分布(%)—1997



覚せい剤は厳しく取り締まられ、その使用は犯罪であるとの意識が、回答に対し防衛的させている誘因と考える。

しかし、若年層の覚せい剤への価値観、罪業観が変化しつつあるのが最近の状況である。

#### c)大麻

大麻を最近・過去に使用したと回答した人は19人で、未成年1人(0.3%)、20歳代7人(1.5%)、30歳代8人(1.3%)、40歳代2人(0.3%)、50歳代1人(0.1%)であった(現在の乱用者は20歳代、30歳代各1人)。

現在も大麻乱用の主な年代層である20代の1.5%、30代の1.3%が大麻を乱用したことがあると回答したことは、大麻の多くの潜在的乱用者の存在がうかがえる。そして一般住民の中に大麻に対する犯罪意識、罪業観の希薄性、認識の甘さがあるために回答しやすくさせている要因があると考えられる。

#### d)コカイン、ヘロイン

コカインの乱用経験者は30歳代の男性2人(0.3%)、ヘロインの乱用経験者は30歳代の男性1人(0.2%)であった。コカイン、ヘロインの乱用の実態は不明であるが、一部で乱用されていることを示している。

### 3)最近の薬物乱用者の発生率について

先述のとおり、「最近1年間の薬物使用の経験者率」は低率であり、最近の薬物乱用者の発生率を同定できなかった。

最近の発生率を考えさせる唯一の結果は、「最近1年間に大麻の使用に誘われた人の比率」の0.16%±0.1%であった。

この数値は「最近1年間の大麻乱用者の周知率」の0.2%±0.1%に近い数値でもある。

以上の結果から、最近の大麻乱用者の発生率は統計的に0.06%~0.3%と推定する。

15歳以上の人口1億5百万人から換算すると、最近の大麻乱用者は6万人から30万人いると考える。これまでの世帯調査の経験から最近の大麻乱用者の発生率および乱用者数は可能性が高い数値である。

この数値は、警察庁、厚生省の薬物事犯検挙者の統計から考えて、大麻乱用者より有機溶剤乱用者、覚せい剤乱用者の方が多いと推測する。

「最近の有機溶剤乱用者の周知率」は、最近の有機溶剤乱用の状況を反映して平成6、7年度<sup>4、5</sup>の結果に比べ減少傾向を示し、今年度は0.6%±0.3%であった。統計的に有機溶剤乱用を疑われる人が0.3%~0.9%存在することになる。和田は<sup>12</sup>平成8年に全国の中学生54,122人を対象に「シンナー遊び」に関する実態調査を施行し、「シンナー遊び」経験率は1.1%であったと報告している。0.3~0.9%の数値は有機溶剤乱用の現状を考えると高率の観があるが、可能性はある。今後の経過を慎重に見守っておきたい。

「最近の覚せい剤乱用者の周知率」は、平成6、7年度の周知率と同じで0.3%±0.2%であり、統計的に覚せい剤乱用を疑われる人は15歳以上の人口の0.1%~0.5%に相当する。

本調査研究が、薬物乱用者の発生率を明らかにすることを目的としたが、信頼度を考えると非常に困難な研究である。発生率は今後の継続的な調査を重ねる中で明らかにされていく課題である。

薬物乱用が社会問題になっている米国では、薬物に対する価値観が異なり、違法薬物は社会に浸透しており、市民の生活により身近な存在である。したがって薬物乱用者の発生率は高く、1994年の米国では「12歳以上の国民の37.6%が何らかの違法薬物の使用経験者であり、最近1ヶ月の使用経験者は国民の6%である」と報告<sup>10</sup>している。このような社会環境下では国民は容易に調査に応じてくれし、発生率の把握も容易である。

わが国の「薬物乱用・依存の世帯(住民)調査」において、回答者の「違法薬物の使用」及び「違法薬物の使用への誘い」についての著しく低い回答率は、国民の違法薬物に対する意識の表れであると考えた。

薬物乱用の意識調査でも認められたように若年者を中心に薬物の使用に肯定的な動きもみられるが、薬物はそれぞれの取締法にて厳しく規制され、違法薬物の使用は犯罪であるとの認識、規範意識がまだ一般的な状況にあると考える。回答者は「薬物の使用」について回答することを防衛的にさせ、躊躇させており、低い回答率となったのであろう。

その意味において、わが国は、欧米、東南アジアの諸国とは異なり、薬物乱用の汚染度は著しく低いと言えるかもしれない。

近年、薬物乱用をめぐる社会環境、国民の意識の変化が認められ、覚せい剤乱用の若年化が警告されているが、薬物乱用・依存の世帯調査結果から、まだ爆発的に流行する可能性は少ないと推察する。

## 8. 薬物乱用・依存の世帯（住民）調査を振り返って

平成4年度より始まった「薬物乱用・依存に関する世帯（住民）調査研究」であったが、調査対象数を増やし、調査対象地区を広げながら、平成7年度と今年度は5,000人を対象とした全国調査を施行した。

層化2段無作為抽出法にて対象を抽出し、個別訪問留置法にて調査を実施してきたが、方法論的に正しいものと考ええる。

喫煙率は日本たばこ産業の実態調査と大体一致しており、医療用向精神薬の使用率は漸増傾向を示していた。喫煙率、飲酒率、医療用向精神薬など高い回答率を得る調査では調査対象数は3千人で精度の高い結果を得ることが可能であると考ええる。

しかし、精神安定薬、睡眠薬と異なり鎮痛薬の「最近1年間の使用率」は調査地区により大きな差を認めた。年間の鎮痛薬使用率は平成4年度(12.6%)、5年度(13.3%)、6年度(14.5%)より平成7年度(34.9%)、本年度(35.5%)の全国調査の方が著しく高率であった。設問は同じであるが、前者は大都市中心であり、後者は10万以上の市、10万未満の市、郡部が多くを占めていた。後者の地域では、訪問販売などによる買い置き鎮痛薬が家庭にあり、容易に使用しやすいことが理由かと考えられるが、それだけでは説明できない。それだけに全国調査を施行する意義があると考えられる。

本調査研究の主目的は、違法薬物使用者の発生率の把握であるが、「最近1年間に違法薬物を使用したと回答した人」は有機溶剤(0.03%)、覚せい剤(0.05%)、大麻(0.05%)とも低率で統計誤差範囲内にあるため統計的に評価することはできなかった。わが国の薬物乱用の汚染度、国民の薬物乱用

に対する意識などを考慮すると、この著しく低い比率は妥当な数値かと考えるが、調査対象数を1~2万に増やしても同じ結果であると推察する。

標本誤差を小さくし、統計的に評価できるようにするには調査対象数5万は必要かと考える。この場合、調査研究費は1億円をこえる。

この世帯（住民）調査は方法論的に正しいものであり、調査対象数5,000の調査を継続的に施行していく中で、「違法薬物の使用経験者」のみならず「違法薬物乱用者の周知率」、「違法薬物の使用に誘われた経験率」などを組み入れながら、薬物乱用の発生率を明らかにしていくべき課題であると考えられる。

## E. 結論

全国の層化2段無作為抽出法で抽出した満15歳以上の男女5,000を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存の世帯調査」を実施した。調査期間は平成9年11月20日から12月8日であった。

1. 有効回答数（率）は3,778（75.6%）であった。
2. 日常生活で、「健康状態」が良くないと感じる人は50歳代20%、60歳以上25%と年齢が高い人に高率であった。「不眠、途中覚醒がある」など睡眠障害に苦しむ人は60歳以上の人の16.5%に認めた。一方、日常生活に意欲がない、仕事・学業の若年層に高率に認めた。
3. 喫煙率は32.7%（男性51.7%、女性15.0%）であった。喫煙者の70%が禁煙を望んでいた。10代、20代の喫煙開始時期の低年齢化の傾向を認めた。
4. アルコールを飲むという人は67.7%（男性79.5%、女性56.7%）で、ほとんど毎日飲むと回答した人は21.4%（男性36.3%、女性7.5%）であった。未成年者の本格的飲酒の開始は喫煙に比べ遅い。
5. 日常生活で何等かの常用薬を使用している人は35.8%で、60歳以上は57%であった。
6. 鎮痛薬の年間の使用者率（週数回以上の常用者率）は35.5%±1.6%（3.5%±0.6%）であり、20~40歳代に高率であった。精神安定薬の使用者率（常用者率）は6.4%

±0.8% (2.4% ±0.5%) であり、60歳以上の人に高率に認めた。

睡眠薬の使用率(常用者率)は4.9% ± 0.7%で60歳以上に高率であった。

7. 薬物乱用の意識調査では、薬物乱用は、社会的には大きな問題であるが、自分とは関係がないと考える人が多く、薬物乱用の弊害についての知識に欠けていた。違法薬物の使用に肯定的な意見が若年層に多かった。

8. 海外旅行、滞在中に薬物の使用を誘われた人は4.6%、使用した人は0.8%であり、海外は薬物乱用の誘惑の機会が多い。

9. 生活の周囲で薬物乱用者を知っていると回答した人(1年以内で知っている人)は、有機溶剤4.7(0.6)%、覚せい剤1.7(0.3)%、大麻0.8(0.2)%、コカイン0.2(0.05)%、ヘロイン0.1(0.05)%であった。

10. 最近1年以内に周囲で薬物乱用者を知っていると回答した人は、有機溶剤0.6%、覚せい剤0.3%、大麻0.2%、コカイン0.05%、ヘロイン0.05%であった。

11. 最近1年以内に薬物の使用に誘われた経験をもつ人は、有機溶剤0.08%、覚せい剤0%、大麻0.16%、コカイン0.03%、ヘロイン0.08%であった。大麻を除き統計誤差範囲内であった。

12. 最近1年以内に違法薬物を使用した人の比率は低率で、有機溶剤0.03%、覚せい剤0.05%、大麻0.05%、コカイン0.03%、ヘロイン0.03%であった。いずれも統計誤差範囲内であった。

13. 最近1年以内に薬物を乱用したと疑われる人は標本誤差を考慮して、有機溶剤は0.3~0.9%、覚せい剤は0.1~0.5%、大麻は0.06%~0.3%と推察する。

14. 平成6年度、7年度の調査結果と比較して、有機溶剤乱用は減少傾向にあり、大麻の潜在的乱用者がは考えられている以上に多いことが判明した。

15. コカイン、ヘロイン乱用は有機溶剤、覚せい剤、大麻より少ないが、社会の一部の人に乱用されており、今後も慎重に経過を見守ることが必要である。

## F. 参考文献

1. 阿部恵一郎：児童福祉施設(教護院)における薬物乱用少年・少女の調査研究、平成8年度厚生科学研究費補助金-薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究(主任研究者寺元弘)平成9年度研究報告書、p115-143、1997。
2. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世帯調査、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)、平成4年度研究報告書、p9-23、1993。
3. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世帯調査、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)平成5年度研究報告書、p5-26、1994。
4. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世帯調査、平成6年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)平成6年度研究報告書、p5-34、1995。
5. 福井進、和田清、伊豫雅臣他：薬物乱用・依存の世帯調査、平成7年度厚生科学研究費補助金-薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究(主任研究者寺元弘)平成7年度研究報告書、p5-36、1996。
6. 福井進、和田清、菊地周一、尾崎茂：薬物乱用・依存の世帯調査、平成8年度厚生科学研究費補助金-薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究(主任研究者寺元弘)平成8年度研究報告書、p7-13、1997。
7. 福井進：わが国の薬物依存の現状、薬物依存(佐藤光源、福井進編集)pp49-59、世界保健通信社、大阪、1993。
8. 警察庁生活安全局薬物対策課：平成8年中における覚せい剤等薬物事犯の統計資料、1997。
9. 厚生省薬務局：平成8年における、麻薬・覚せい剤行政の概況、1997。
10. 尾崎茂、和田清、福井進：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査、平成8年度厚生科学研究費補助金-薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究(主任研究者寺元弘)平成9年度

研究報告書、p61-84、1997.

11. SAMHAS : National Household Survey on Drug Abuse : Main Findings 1994. U.S. Department of Health and Human Services, Public Health Service. DHHS Publication No. (SMA)96-3085. 1996.

12. 和田清:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究、平成8年度厚生科学研究費補助金-薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究(主任研究者寺元 弘)平成9年度研究報告書、p21-60、1997.

## 質問内容

問1 最近1年間のあなたの健康状態や生活状態などについてお伺いします。以下のア～キのそれぞれについて、お答え下さい。(それぞれ○は1つ)  
ア) あなたの健康状態はいかがですか。

問1 イ) あなたは、日常の生活、活動に意欲がなくなることがありますか。

問1 ウ) あなたは、毎日している仕事(家事・勉強)でうまくいかないことがありますか。

問1 エ) あなたは、日常の生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか。

問1 オ) あなたは、眠りにつけなかったり、睡眠の途中で目が覚めたり、眠った感じがしなくて困ることがありますか。

問1 カ) あなたは、眠りすぎたり、昼間に眠くてたまらないときがありますか。

問1 キ) あなたは、現在の生活に満足していますか。

問2 あなたは、現在たばこをお吸いになりますか。(○は1つ)

補問1 (たばこを吸っている方におたずねします。)  
これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか。  
(○は1つ)

補問2 あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか。(○は1つ)

補問3 では、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか。(○は1つ)

問3 アルコール(酒、ビール、ウイスキー等)はお飲みになりますか。(○は1つ)

補問1 (アルコールをお飲みになる方におたずねします。)  
最近、主にどういう機会に飲むことが多いですか。(○はいくつでも)

補問2 では、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか。(○は1つ)

補問3 あなたが、本格的にアルコールを飲み始めたのはいつ頃ですか。(○は1つ)

問4 次の薬のうち、あなたのご家庭にいつも用意しているものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)

問5 次の薬のうち、あなたが常用(週に数回以上を使用)している薬がありますか。あてはまるものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)

問6 あなたは、最近1年間に鎮痛薬を使用したことがありますか。(○は1つ)

補問1 (問6で2～6と答えた方へ)  
鎮痛薬はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)

補問2 (問6で2～6と答えた方へ)  
使用理由を教えてください。(○はいくつでも)

補問3 (問6で2～6と答えた方へ)  
服用後に次のようなことを経験したことがありますか。あるものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)

(全員の方に)  
問7 あなたは、最近1年間に精神安定薬(抗不安薬)を使用したことがありますか。  
(○は1つ)

補問1 (問7で2～6と答えた方へ)  
精神安定薬(抗不安薬)はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)

補問2 (問7で2～6と答えた方へ)  
使用理由を教えてください。(○はいくつでも)

補問3 (問7で2～6と答えた方へ)  
服用後に次のようなことを経験したことがありますか。(○はいくつでも)



(全員の方に)  
問8 あなたは、精神安定薬（抗不安薬）についてどうお考えですか。  
(○はいくつでも)

問9 あなたは、最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか。(○は1つ)

補問1 (問9で2～6と答えた方へ)  
睡眠薬はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)

補問2 (問9で2～6と答えた方へ)  
使用理由を教えてください。(○はいくつでも)

補問3 (問9で2～6と答えた方へ)  
服用後に次のようなことを経験したことがありますか。(○はいくつでも)

(全員の方に)  
問10 あなたは、睡眠薬についてどうお考えですか。次の中からあてはまるもの  
にいくつでも○をつけて下さい。(○はいくつでも)

問11 薬物乱用という言葉を知っていますか。(○は1つ)

問12 次の薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつ  
けて下さい。(○はいくつでも)

問13 乱用薬物を使用すると、依存（使用を止めたくても止められなくなる状態）  
が形成されることを知っていますか。(○は1つ)

問14 覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々  
にも関係のある問題だと思いませんか。(○は1つ)

問15 「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることもある」と思いませんか。  
(○は1つ)

問16 街頭や公園などで、「シンナー遊び」をしている人は以前と比較して増え  
たと思いませんか、それとも減ったと思いませんか。

問17 「シンナー遊び」が一部の未成年者の間で流行していることを知っていま  
すか。(○は1つ)

問18 近年、「覚せい剤」が一部の未成年者の間で流行していることを知ってい  
ますか。

問19 覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていま  
すか。(○は1つ)

問20 大麻について、覚せい剤、シンナーなどに比べて次のような意見がありま  
すが、あなたは、どう思いますか。

問21 覚せい剤、シンナー、大麻などの薬物を使うことについて、どのように考  
えていますか。

問22 あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか。あて  
はまるものにいくつでも○をつけて下さい。(○はいくつでも)

補問1 (問22で2～6と答えた方へ)  
海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしまし  
たか。(○は1つ)

補問2 (問22で2～6と答えた方へ)  
海外滞在中に、あなたは薬物使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)

補問3 (問22で2～6と答えた方へ)  
海外滞在中に、あなたが使用された薬物があれば教えてください。  
(○はいくつでも)

問23 あなたの周囲で、薬物を乱用している（乱用していた）人を知っていますか。  
(○は1つ)

補問1 その人が使用している（乱用していた）薬物は何ですか。(○はいくつでも)

問24 あなたご自身、これまでにシンナー等有機溶剤の使用を誘われたことがありますか。(○は1つ)

補問1 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問25 あなたご自身、これまでに覚せい剤の使用に誘われたことがありますか。  
(○は1つ)

補問1 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問26 あなたご自身、これまでに大麻（マリファナ）の使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)

補問1 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問27 あなたご自身、これまでにコカインの使用に誘われたことがありますか。  
(○は1つ)

補問1 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問28 あなたご自身、これまでにヘロイン等麻薬の使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)

補問1 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問29 あなたは、これまでに「シンナー遊び」を経験したことがありますか。  
(○は1つ)

問30 あなたは、これまでに「覚せい剤」を使用したことがありますか。  
(○は1つ)

問31 あなたは、これまでに「大麻（マリファナ）」を使用したことがありますか。  
(○は1つ)

問32 あなたは、これまでに「コカイン」を使用したことがありますか。  
(○は1つ)

問33 あなたは、これまでに「ヘロイン」を使用したことがありますか。  
(○は1つ)

問34 性別を教えてください。

問35 お年は満でおいくつですか。

問36 最後に出られた学校は次のどれにあたりますか。  
(中退・在学中は卒業とみなす)

問37 あなたは、結婚されていますか。配偶者の方はご健在ですか。(○は1つ)

問38 あなたは、現在、パートタイム、アルバイト等を含めて何かお仕事をされていますか。(○は1つ)

補問1 (問38で1～5と答えた方に)  
どのようなお仕事ですか。具体的にご記入の上、あてはまる番号に1つだけ  
○印をおつけ下さい。(○は1つ)

地域

都市規模

性・年齢別